

2018年度

科目等履修生・聴講生 講義一覧

【授業時間】

①限 8:50～10:20 ②限 10:30～12:00 ③限 12:50～14:20 ④限14:30～16:00 ⑤限 16:10～17:40

【科目一覧】

No.	開講期	2018開講科目名称	教員名	曜日・時限	受講可否	
					科目等履修生	聴講生
1	前学期	企業論	平野 真	月①	○	○
2	前学期	生物学	芦田 信之	月①	○	○
3	前学期	地域イノベーション	平野 真	月②	○	○
4	前学期	経営学入門	加藤 好雄	月②	○	○
5	前学期	保健体育	芦田 信之	月③	○	○
6	前学期	簿記論 I	井上 直樹	月③	○	○
7	前学期	人的資源管理論	篠原 正人	月③	○	○
8	前学期	教育学	江上 直樹	月④	○	○
9	前学期	経営管理論	篠原 正人	月④	○	○
10	前学期	観光総論	中尾 誠二	月⑤	○	○
11	前学期	マーケティング	加藤 好雄	月⑤	○	○
12	前学期	ヘルスツーリズム論	芦田 信之	火①	○	○
13	前学期	環境学	中尾 誠二	火①	○	○
14	前学期	非営利組織論	杉岡 秀紀	火①	○	○
15	前学期	歴史学	井口 和起	火②	○	○
16	前学期	流通システム論	佐藤 充	火②	○	○
17	前学期	地域防災論	福島 貞道	火③	○	○
18	前学期	工業簿記	井上 直樹	火⑤	○	○
19	前学期	農業経営論	塩見 直紀	水①	○	○
20	前学期	持続可能な社会論	矢口 芳生	水①	○	○
21	前学期	地域資源論	谷口 知弘	水②	○	○
22	前学期	数学基礎 I	三品 勉	水②	○	○
23	前学期	地方自治論	杉岡 秀紀	水②	○	○
24	前学期	グローバル特別講義Ⅲ(公共経営演習Ⅲ)	谷口知弘 / 杉岡秀紀	水③	○	○
25	前学期	中小企業論	佐藤 充	水③	○	○
26	前学期	統計学	三品 勉	水③	○	○
27	前学期	多文化共生論	芦田 信之 他	水④	○	○
28	前学期	財務諸表論	井上 直樹	水④	○	○
29	前学期	グローバル特別講義Ⅲ(地方行財政)	福島 貞道	水④	○	○
30	前学期	地域文化論	井口 和起	木①	○	○
31	前学期	政治学	富野 暉一郎	金②	○	○
32	前学期	財政学	三好 ゆう	金②	○	×
33	前学期	プログラミング I	神谷 達夫	金⑤	○	○

2018年度

科目等履修生・聴講生 講義一覧

【授業時間】

①限 8:50～10:20 ②限 10:30～12:00 ③限 12:50～14:20 ④限14:30～16:00 ⑤限 16:10～17:40

【科目一覧】

No.	開講期	2018開講科目名称	教員名	曜日・時限	受講可否	
					科目等履修生	聴講生
34	後学期	経営戦略論	平野 真	月①	○	○
35	後学期	グローバルビジネス	平野 真	月②	○	○
36	後学期	簿記論Ⅱ	井上 直樹	月③	○	○
37	後学期	グリーンツーリズム論	中尾 誠二	月③	○	○
38	後学期	経営組織論	篠原 正人	月④	○	○
39	後学期	交流観光政策論	中尾 誠二	月⑤	○	○
40	後学期	原価計算論	井上 直樹	火①	○	○
41	後学期	地域協働論	杉岡 秀紀	火①	○	○
42	後学期	文学	井口 和起	火②	○	○
43	後学期	地域産業論	佐藤 充	火②	○	○
44	後学期	自治体政策法務	福島 貞道	火③	○	○
45	後学期	コミュニティビジネス	塩見 直紀	水①	○	○
46	後学期	地域農業システム論	矢口 芳生	水①	○	○
47	後学期	論理学	佐藤 恵	水①	×	○
48	後学期	観光まちづくり論	谷口 知弘	水②	○	○
49	後学期	数学基礎Ⅱ	三品 勉	水②	○	○
50	後学期	グローバル特別講義Ⅳ(公共経営演習Ⅳ)	谷口知弘 / 杉岡秀紀	水③	○	○
51	後学期	社会調査論	佐藤 充	水③	○	○
52	後学期	経営工学概論	三品 勉	水③	○	○
53	後学期	交流居住論	塩見 直紀	水③	○	○
54	後学期	公共経営入門	杉岡 秀紀	水④	○	○
55	後学期	地理学	福島貞道 / 塩見直紀	水④	○	○
56	後学期	グローバル特別講義Ⅱ(外国文化論)	井口 和起	木①	○	○
57	後学期	経済学入門	三好 ゆう	金②	○	×
58	後学期	ソーシャルデザイン	谷口 知弘	金③	○	○
59	後学期	行政学	富野 暉一郎	金④	○	○
60	後学期	プログラミングⅡ	神谷 達夫	金⑤	○	○

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
企業論				平野 真	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
企業とはどのような考えのもとに、どのように運営されているのでしょうか？本科目では、現代の企業経営を理解するため、1) 経営哲学、2) 事業分野・事業内容、3) 事業規模と発展段階、4) 産業構造や社会での位置付け、という4つの観点から、分析を行います。より具体的には、1) 事業の発展性と継続性のバランスの取り方、2) 事業内容に依存した経営手法の違い、3) 事業の規模や発展段階に応じた組織運営の違い、4) 産業構造や地域社会の中で果たす役割などを学習し、これらの因子の違いから実際の企業がどのように運営されているか理解することを目的とします。前半の授業では理論的な学習を行い、ケース課題の分析を通じて理解を深めます。後半の授業では現実の企業をチームで調査・分析することを通じて、さらに企業への理解力・分析力を養います。なお授業の進め方や評価手法については、多少の変更を行うことがあります。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
1)経営哲学の違いにより現実の企業経営がどのように影響を受けるかについて説明し、具体的な事例を挙げることができる。2)事業分野や事業内容の違いによる企業経営の在り方の違いを例をあげて説明できる、3) 事業の規模や発展段階の違いによる組織運営の違いを説明できる、4) 産業構造や社会の中で果たす役割と企業経営の最適性について、自分の考えを述べられる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション、第一部企業経営の基礎 (1) 企業とは？				
第 2 回	第一部企業経営の基礎 (2) 経営の基礎：分業と分配				
第 3 回	第一部企業経営の基礎 (3) 経営哲学：発展か継続か、ベンチャー型と老舗型				
第 4 回	第一部企業経営の基礎 (4) 事業分野と事業内容：産業特質と製品寿命				
第 5 回	第一部企業経営の基礎 (5) 事業規模と事業の発展：企業の成長と課題				
第 6 回	第一部企業経営の基礎 (6) 価値の体系と産業構造：垂直統合と水平分業、				
第 7 回	第一部企業経営の基礎 (7) 産業構造の変容：製造業からサービス業へ、				
第 8 回	第一部企業経営の基礎 (8) 地域社会と企業：産業集積、協働、企業文化				
第 9 回	第一部の復習とまとめ				
第 10 回	中間テストによる知識確認				
第 11 回	第二部企業分析 WSチーム分けとテーマの選択				
第 12 回	第二部企業分析 WS作業と発表準備				
第 13 回	第二部企業分析 WS発表会 1				
第 14 回	第二部企業分析 WS発表会 2				
第 15 回	総復習とまとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
前半は毎回、次回の予習を兼ねた事例分析などを宿題として課す。しかし授業で特に重要なのは復習である。授業で学習した内容がよく理解できない場合は、必ず次回に質問して理解を深めるようにする。途中で理解を確認するテストがあるので、この準備をすることを通じ、忘れないように学習した知識を整理すること。後半は、チームごとに、主体的に調査や分析、発表の準備を行う。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
宿題や授業中の発言など (20%) 中間テスト (20%) チーム発表 (20%) 最終テストまたはレポート(40%)	秀：適切に問題点を指摘し、特筆すべき鋭い分析や考察ができ、現実的な解決策を提示できる 優：授業で学習したことを良く理解でき指摘した問題点に対し適切な解決策を提示できる 良：授業で学習した内容を基本的には理解でき、指摘した問題点に対し解決策を提示できる 可：授業内容の理解、問題点の指摘と解決策の提示が、最低限の水準を満たしている 不可：授業の内容が理解できておらず、問題点や解決策の提示ができない、あるいは3分の1を超えて欠席した
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 授業で配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	経営能力開発センター編「経営学検定試験公式テキスト1」中央経済社 (就職対策として、資格の取得に興味のある人に役立つ。) 基本的には、講義のレジュメの中で、参考文献を紹介する。
備考 (Other Information)	3分の1以上 (6回以上) の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メール連絡 hirano-makoto@fukuchiyama.ac.jp

科目名称 (Course Title)				担当教員 (Instructor)	
生物学				芦田 信之	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要 (Course Description)					
医療福祉経営学科では、診療情報管理士をめざすにあたり、その業務内容が診療録の管理であり、診療録に記載された病気の診断病名をコーディングすることから、病気に関する知識が不可欠であり、それらに関する専門科目が多く開講されている。それらの学習の前提となる人体の構造と機能の基礎知識があることが望ましい。広い生物学の学習範囲の中から、人体に関する分子生物学や細胞生物学および病原微生物学を題材とした生物学を学ぶ。 地域経営学科の学生も、教養として人体の構造と機能を学ぶ。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
生物の構成成分（タンパク質、核酸、脂質、糖質など）を理解し、生物と無生物の境界が考察できる。 細胞の機能と働きを知り、単細胞と多細胞の境界を考察できる。人体の組織、臓器の働きを知り、健全な状態と病的な状態の理解ができる					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	授業ガイダンス、細胞と個体のなりたち 細胞膜と細胞内小器官				
第 2 回	単細胞生物と多細胞生物				
第 3 回	生殖と発生 ひとつの受精卵から 生物は子孫を残す。				
第 4 回	分子生物学からみた生命 生体の機能とタンパク質				
第 5 回	生体内の化学反応と酵素 酵素はたんぱく質でできている。				
第 6 回	遺伝と遺伝情報 DNAの構造と遺伝のしくみ たんぱく質合成のしくみ				
第 7 回	細胞、組織、器官 臓器の働き				
第 8 回	植物生理学のすすめ 動物と植物の違い				
第 9 回	人体生理学 刺激の受容と反応 五感（視覚、聴覚、味覚、臭覚、触覚）と脳				
第 10 回	受容器と効果器 筋肉のはたらき				
第 11 回	受容器と効果器 筋肉のはたらき				
第 12 回	内部環境の恒常性 体液の恒常性				
第 13 回	自律神経系とホルモン 体温の維持、血糖値の調節				
第 14 回	免疫と病原性微生物 細胞性免疫と体液性免疫				
第 15 回	バイオテクノロジーと生命倫理				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業計画に書かれている各回のテーマを確認し、必要な予習・復習をすること					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (60 %) 毎講義の確認テスト (40 %)	秀：要求された程度を超えて優秀な成績。基準点として90～100点 優：要求にふさわしく優れた成績。基準点として80～89点 良：要求をみたす成績 基準点として70～79点 可：単位取得を認める合格最低ライン。 基準点として60～69点 不可：合格最低ラインに達しない成績。 基準点として59点以下
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	google classroom にて資料配布と課題提出を行う。インターネット上には、優れた「生物学」・「人体のしくみ」・「生理学」の教材がある。各回のテーマを確認し、予習・復習すること
備 考 (Other Information)	毎回、前回の内容の小テストをおこなう。3分の1以上（6回以上）の欠席は単位不可とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	講義終了時またはメールにて質問や相談日時を受け付ける。メールアドレス：ashida-nobuyuki@fukuchiyama.ac.jp

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
地域イノベーション (地域企業振興論)				平野 真	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要 (Course Description)					
この授業では、地域において具体的にどのように産業や地域社会を活性化しあるいは行政も含めてイノベーション（革新、新規ビジネスなど）を起こしていくか、その手法を学び、ワークショップによりスキルを身につけていくことを目的とします。科目授業として学んだマーケティングや企業経営、戦略論などの経営知識、また公共経営の知識をも総動員して、つまり今まで学んできたことの総復習を行いながら、自ら考え創造していく能力を身につけます。特に、「地域での」イノベーション創発において、どのようなことに留意すべきかも考えながら、現実に地域で起業したり、地域の特産物を開発したり、地域の観光を活性化したりするための、具体的な手法と知恵を学びます。なお授業の進め方や評価手法については、多少の変更を行うことがあります。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
1) 売れる商品や、人の来る観光地をつくるための考え方を理解する、2) ビジネスにおいて利益を創出するための基本的な考え方を理解する、3) 事業プランを練るための基本技術を習得する、4) 簡単な企画書を書き、多くの人の前で発表することができる					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション、イノベーションとは？				
第 2 回	アイデアの創出：ドラッカーの指摘するビジネスチャンス				
第 3 回	利益の創出：損益分岐という概念の深い理解				
第 4 回	ブランドの形成：無形資産の経営				
第 5 回	アイデア発表会（学生による提案、個人発表）				
第 6 回	企画書の書き方：押さえておくべきポイント				
第 7 回	事業戦略の考え方：戦略ツールの図				
第 8 回	人を動かすリーダーシップ：資質論から行動論へ				
第 9 回	組織をどう動かすか：組織運営の目指すもの				
第 10 回	中間テストによる理解確認				
第 11 回	ワークショップのチーム分けとテーマの選択				
第 12 回	参考となるイノベーション事例の紹介				
第 13 回	プレゼンテーション技術について（考え方とノウハウ）				
第 14 回	企画書発表会（チーム発表）				
第 15 回	総復習とまとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業時間外に、自分のアイデアをまとめたり、チームでの打ち合わせをしてチーム発表に備えたりしなければならない。そのためには、授業で学んだことを復習し、内容を理解していないと前へ進めない。自ら努力し学習し、チームをもまとめていく主体的な態度、すなわち現実社会で実際に仕事を行っていくための基本的な姿勢を身につけていくことが要求される。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
アイデア発表 (20%) 中間テスト (20%) チーム発表 (30%) 最終テストまたはレポート (30%)	秀：適切に問題点を指摘し、特筆すべき鋭い分析や考察ができ、現実的な解決策を提示できる 優：授業で学習したことを良く理解でき指摘した問題点に対し適切な解決策を提示できる 良：授業で学習した内容を基本的には理解でき、指摘した問題点に対し解決策を提示できる 可：授業内容の理解、問題点の指摘と解決策の提示が、最低限の水準を満たしている 不可：授業の内容が理解できておらず、問題点や解決策の提示ができない、あるいは3分の1を超えて欠席した
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 授業で配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	経営能力開発センター編「経営学検定試験公式テキスト1」中央経済社（就職対策として、資格の取得に興味のある人に役立つ。） 基本的には、講義のレジュメの中で、参考文献を紹介する。
備考 (Other Information)	3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メール連絡 hirano-makoto@fukuchiyama.ac.jp

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
経営学入門				加藤 好雄	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
経営とは、組織や事業を運営・管理することである。組織には企業をはじめ、病院や行政組織も含まれてくる。また、事業（プロジェクト）には大規模な事業から身近なプロジェクトまで様々なかたちで存在している。 本講義では、様々な側面をもつ経営について、「制度の選択」「戦略の形成」「組織の枠組みづくり」「組織における人間の対応」の4つの領域に整理して進める。また、経営学を学ぶための手法であるケーススタディについても説明を行う。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
本講義では、以下の3点の知識・能力を習得することを目的とする。 ①経営学の基礎概念を理解している。 ②経営学の基礎的な用語を説明することができる。 ③企業等の経営について適切な用語を用いて説明することができる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス+経営学の基礎概念				
第 2 回	経営学とはどのような学問か+企業と会社の制度的な特徴				
第 3 回	コーポレートガバナンスと企業の社会的責任				
第 4 回	経営理念、目的と戦略				
第 5 回	企業戦略				
第 6 回	競争戦略と事業システム				
第 7 回	小テスト①+今までの復習				
第 8 回	組織構造				
第 9 回	組織文化+コンフリクト				
第 10 回	リーダーシップ+モチベーション				
第 11 回	小テスト②+今までの復習				
第 12 回	ケースにおける課題解決の手法①（戦略・組織）				
第 13 回	ケースにおける課題解決の手法②（戦略・組織）				
第 14 回	ケースにおける課題解決の手法③（戦略・組織）				
第 15 回	まとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
基礎概念・用語・知識は講義によって学ぶが、理解を深めるために講義内で指示した課題等を行うこと。また、小テストと期末試験を行うので、テキストや講義時に配布した資料の復習は必ず行うこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (40%) 小テスト×2回 (60%)	秀：「授業の到達目標」を非常に高いレベルで満たしている。 優：「授業の到達目標」を高いレベルで満たしている。 良：「授業の到達目標」を十分に満たしている。 可：「授業の到達目標」を満たしている。 不可：「授業の到達目標」を満たしていない。
テキスト (Textbook)	【書 名】経営学入門 【著 者】藤田誠 【出版社】中央経済社 【出版年】2015年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	必要な資料は講義中に配布する。
備 考 (Other Information)	小テスト2回と期末試験で成績の評価をする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	第1回目の講義で説明する。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
保健体育(体育理論/身体運動の科学)				芦田 信之	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要(Course Description)					
人が成長する過程において、知育・徳育・体育・食育があり、そのうち体育は運動を通じて人格形成・成長の教育の場であった。運動を通じた体づくりは、そのライフステージにおいて、それぞれ、学校教育、社会人の生涯スポーツ、高齢者の健康維持に必要な生活習慣である。学校教育において体育は講義科目としての保健体育と実技としての各種スポーツの実施が組み込まれている。本講義は健康増進を目指して運動をおこなうにあたり、身体の仕組みと機能をまなび、運動習慣の形成を促すものである。また、競技スポーツを自然科学の視点からとらえ、スポーツ生理学、スポーツ物理学、用具の科学等を学ぶことによって、日常生活に運動を取り入れるための理論を学ぶ					
授業の到達目標(Course Objectives)					
身体 の構造と機能についての知識を身につける。日常生活に運動を取り入れ、運動習慣を身につける。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	授業ガイダンス 健康増進の生活スタイル				
第 2 回	運動習慣と生活習慣病予防				
第 3 回	骨・筋肉構造と機能 エネルギー補給				
第 4 回	間違いだらけの健康情報				
第 5 回	栄養とスポーツ				
第 6 回	身体能力 活動度測定 バイタルサイン				
第 7 回	子供の体力・運動能力				
第 8 回	加齢と運動				
第 9 回	脳と運動 随意運動 不随意運動				
第 10 回	ストレスと運動 自律神経、ホルモン調節				
第 11 回	運動トレーニング バイオメカニクス				
第 12 回	スポーツの中の科学 ルールと記録				
第 13 回	スポーツの中の科学 運動と物理学				
第 14 回	スポーツの中の科学 ゲームの数理科学 強さの指標				
第 15 回	生涯スポーツ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
授業計画に書かれている各回のテーマを確認し、必要な予習・復習をすること					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (60 %) 毎講義の確認テスト (40 %)	秀：要求された程度を超えて優秀な成績。基準点として90～100点 優：要求にふさわしく優れた成績。基準点として80～89点 良：要求をみたす成績 基準点として70～79点 可：単位取得を認める合格最低ライン。 基準点として60～69点 不可：合格最低ラインに達しない成績。 基準点として59点以下
テキスト (Textbook)	【書名】 これからの健康とスポーツの科学 第4版 【著者】 阿部孝・琉子友男 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	google classroomにて資料配布をおこなう。
備 考 (Other Information)	毎回、前回の内容の小テストをおこなう。3分の1以上（6回以上）の欠席は単位不可とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	講義終了時またはメールにて質問や相談日時を受け付ける。メール アドレス：ashida-nobuyuki@fukuchiyama.ac.jp

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
簿記論 I				井上 直樹	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要 (Course Description)					
簿記は、企業等が行う様々な取引活動を効率的かつ体系的に記録し、ある時点での財政状態や一定期間の経営成績を明らかにするために必要とされるものである。 本講義では、複式簿記についての基礎的な知識や技術を修得し、取引の仕訳から勘定記入、決算手続きまでの一連の流れを学んでいく。 本講義では、小規模株式会社を主な対象としているが、複式簿記にもとづく発生主義会計の考え方を理解することで、営利・非営利を問わず、各主体における会計上の問題や課題の発見につなげることを目的とする。また、問題や課題解決のために、適切かつ的確な会計情報の収集・分析に必要とされる基礎的技能の学修を目指す。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
小規模株式会社を前提として、簿記論の前提となる貸借原理・帳簿組織の基礎知識を修得し、簿記一巡の流れを理解することができる。また、仕訳による基本的な個々の会計処理を修得し、簿記の基本用語や複式簿記の仕組みを理解し、業務に活用することができる。 簿記の技術は自分の手を動かしてようやく身に付くものであるため、特に、日商簿記検定試験を受験する学生は、講義外において、できるだけ多くの問題を解く必要がある。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンスと簿記の全体像				
第 2 回	貸借対照表と損益計算書				
第 3 回	帳簿記入 (1)				
第 4 回	帳簿記入 (2)				
第 5 回	商品売買				
第 6 回	現金預金				
第 7 回	手形				
第 8 回	その他の債権と債務				
第 9 回	固定資産				
第 10 回	純資産				
第 11 回	収益と費用				
第 12 回	試算表の作成				
第 13 回	総合問題演習と解説 (1)				
第 14 回	総合問題演習と解説 (2)				
第 15 回	これまでの内容のまとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業ごとに前回授業内容に関する小テストを実施するため、毎回1時間程度の復習をしておくこと。 次回講義の予習として、テキストの該当箇所を1時間程度事前に読んでおくこと。 実際に仕訳をノートに書いて問題を解くことが、簿記の理解と上達につながる。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (80%) 講義中の小テスト (10%) 授業態度 (10%)	秀: 100点 - 90点 優: 89点 - 80点 良: 79点 - 70点 可: 69点 - 60点 不可: 59点 - 0点
テキスト (Textbook)	【書名】 土日で合格の日商簿記初級 【著者】 資格の大原 【出版社】 中央経済社 【出版年】 2017
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	必要に応じて、講義で配布するレジュメで指示する。
備考 (Other Information)	・第12回以降の講義には、テキストおよび電卓を携行すること (12桁以上、大きさ: 10cm×15cm以上のものが望ましい)。 ・私語厳禁を徹底する。 ・授業の進捗等を判断し、授業計画を変更する場合がある。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メールによる予約。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
人的資源管理論(労務管理論)				篠原 正人	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
人材は、企業のみならず行政、学校、ボランティア団体、クラブ活動など、どのような組織を運営する際にも重要である。 この授業では、組織を円滑に運営するためにどのような人材が必要となるのかについて、基礎的な理論と実際の状況を学ぶ。 また、履修者自らの体験と照らし合わせ、人材をどのように確保し、育成していったらいいのかについて共に考えることとする。 また、新聞などのメディアの情報を駆使し、人的資源管理（労務管理）の実例を基に理論が学べるよう工夫をする。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
1) この授業を通じて、履修者は人的資源の重要性とその管理・開発の方法の基礎を習得し、それを理解できている。 2) 履修者が日常接する機会のある労務問題を取り上げて、理論と照らし合わせることができる。 3) 人前で自分が考察した結果を適切に発表できる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	社会で働くことの意義について				
第 2 回	人材とは				
第 3 回	労務管理（人的資源管理）についての理論				
第 4 回	人材についての自己体験について				
第 5 回	企業の労務管理（人的資源管理）とは				
第 6 回	採用について				
第 7 回	企業内研修と企業外研修				
第 8 回	自己学習の意義				
第 9 回	会社員や行政職員の一生				
第 10 回	学歴と経営への貢献度				
第 11 回	どのような人材が望まれるか				
第 12 回	賃金体系と昇格				
第 13 回	フリンジベネフィット				
第 14 回	キャリア形成プラン（1）				
第 15 回	キャリア形成プラン（2）				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
自分のライフプランを考えてみる。 すなわち、大学を卒業してから、どのような進路に進み、そこで何の仕事をし、30歳、40歳、50歳、60歳、そして退職後に、自分はいかなる人になりたいかを考え、それを可能にする準備は何が必要か、シナリオを書いてみる。 人前で発表できるよう練習をする。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業への貢献度 (50%) 課題 (50%) を基本とする。 10回以上出席を単位付与の条件とする。	秀：学んだ専門用語を駆使して、論理的・客観的な説明ができ、かつ、問題点の解決方法を指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的・客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している 良：おおよその説明はできており、問題点を理解している 可：人的資源管理とは何かを説明することについて、最低限の水準を満たしている 不可：学習の意欲がなく、学んだ内容を説明できない
テキスト (Textbook)	【書名】 「人材マネジメント入門」 【著者】 守島基博 【出版社】 日本経済新聞出版社 【出版年】 2004年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	日本経済新聞 エコノミスト 週刊ダイヤモンド その他、講義の中で適宜参考文献を紹介する
備考 (Other Information)	大学教育は「教えてもらう」ものではなく、学生が自分で学習するのを教員が「アシスト」するのだという原則を貫く。 課題レポートを提出しなかった者は単位付与付加とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	shinohara-masato@fukuchiyama.ac.jp

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
教育学				江上 直樹	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
ひとえに「教育学」といっても、そこには教育哲学・教育史・教育方法学・教育心理学・教育社会学・教育法学・教育行政学・比較教育学等の様々な学問領域が存在する。本講義では、それら教育学の各種領域について入門的な内容を紹介するとともに、現在の教育に関する論点について具体的な事例を取り上げて各テーマについて検討する。 教育という営みは、現代社会で生活するうえで誰しもが経験するものであり、教育問題について思索する際に、自身の経験のみをその根拠として議論を行う者も少なくない。しかしながら、その教育問題の背景には、人間個々の問題から法制度等の社会的な背景まで様々な論点が存在する。そこで本講義では、教育学の各種領域についての基礎的な知識を習得することともに、現代的な教育問題について主体的に思索する機会を提供し、教育について多面的な観点から考察を進めることができるようになることをその目的とする。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
①教育学の各種領域について、その概要を簡単に説明することができるようになる。 ②教育に関する問題について、多面的に問いを立てることができるようになる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション（講義の進め方、評価方法）、教育学の各種領域について				
第 2 回	教育の意義と目的				
第 3 回	教育思想①（ソクラテスの産婆術、コメニウスの大教授学、ルソーの子ども観）				
第 4 回	教育思想②（ペスタロッチの開発教授、ヘルバルトの教授法、デューイの児童中心主義）				
第 5 回	教育史①（古代ギリシア～古代ローマ～中世ヨーロッパ～産業革命期の近代公教育へ）				
第 6 回	教育史②（日本の教育史：古代の学校～中世の学校～学制による近代公教育制度の確立）				
第 7 回	教育制度①（教育制度の基本原理、教育における法律主義）				
第 8 回	教育制度②（日本の教育行政組織）				
第 9 回	教育制度③（教員の養成・採用・研修）				
第 10 回	教育課程①（学習指導要領の変遷）				
第 11 回	教育課程②（学校で身につける能力とは）				
第 12 回	教育方法①（授業の歴史、授業のデザイン）				
第 13 回	教育方法②（教育の評価）				
第 14 回	その他の教育上の論点				
第 15 回	まとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
各講義において予習用の資料を配布するので、それを読み次回の授業に備えること。 （講義では予習してきたことを前提として、履修者に発言を求める機会を設ける）					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業への貢献度 (30%)	●授業への貢献度：出席状況、授業時の発言、グループワーク時の取り組み姿勢、受講態度等を総合的に判断する。 ●小課題：講義の節目ごとに小課題を提示する。小課題については主に提出の有無を重視する。 ●期末レポート：現在の教育問題について、授業で紹介した内容や教育学的背景に基づきながら論点を整理し自身の意見を論じることができるか、といった点を評価のポイントとする。
小課題 (20%)	
期末レポート (50%)	
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	授業時に適宜配布、提示する
備考 (Other Information)	
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	研究室（4号館4階5研究室）へはいつでも訪問してよいが、席を外している場合も多いので、面談等を希望する場合はメール等（egami-naoki@fukuchiyama.ac.jp）で事前に連絡するのが望ましい。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
経営管理論				篠原 正人	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
1回生担当の「経営学入門」を基礎に、それをさらに進めて、企業あるいは行政組織における経営管理（マネジメント）の理論を学ぶ。 授業の土台はP. ドラッカーの「マネジメント」に置き、他の理論家の説にも触れながら、実際になされている業務に沿って授業を進める。 授業の重点は、学説よりむしろ企業・行政組織の経営に合致した、実践的なものとする。 従って授業においては、教科書輪読に加え、実際に社会で起こっている経営的事象を題材にして、実践的な知識を身に付けることとする。 授業は原則として教科書に沿って進め、履修者が自らその内容を予習し、授業中に自らそれを解説するという能動的な態勢を取る。さらに、履修者が自分で調べてきたテーマを、発表する機会を多く設ける。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
1) 企業や行政組織がどのような考え方に基いて運営されているのかを理解している。 2) 組織の中で人が効率よく働くために、どのような仕組みが必要かを理解している。 3) 組織の成長を促すために、どのような革新が必要かを理解している。 4) 西洋的経営と日本的経営の比較ができる。 5) 人前で自分が考察した結果を適切に発表できる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	経営管理とは何か				
第 2 回	経営学の理論の変遷：主な理論の復習				
第 3 回	事業の目的とは				
第 4 回	行政組織とNPOの目的とは				
第 5 回	人のマネジメント				
第 6 回	社会的責任				
第 7 回	経営者・マネジャーの役割				
第 8 回	意思決定とコミュニケーション				
第 9 回	マネジメント組織				
第 10 回	会計・税務と財務				
第 11 回	合併と統合				
第 12 回	西洋的経営と日本的経営				
第 13 回	経営問題ケーススタディー（1）				
第 14 回	経営問題ケーススタディー（2）				
第 15 回	授業のまとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
経営の実際を学ぶ機会を見つけ、理論と照らし合わせてみる。 特に、実践的教育を通じて地域連携の中で企業や官庁の経営の実態を学ぶ。 新聞や雑誌を通じて、社会で起きている経営問題に関心を持つ。 人前で発表できるよう練習をする。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業への貢献度 (50%) 課題 (50%) を基本とする。	秀：学んだ専門用語を駆使して、論理的・客観的な説明ができ、かつ、問題点の解決方法を指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的・客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している 良：おおよその説明はできており、かつ、問題点を理解している 可：経営管理の仕組みや問題点の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：経営管理の仕組みや問題点が説明できていない
テキスト (Textbook)	【書名】 「マネジメント」エッセンシャル版 P.ドラッカー 【出版社】 ダイヤモンド社 【出版年】 2001年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	日本経済新聞 エコノミスト 週刊ダイヤモンド その他、講義の中で適宜参考文献を紹介する
備考 (Other Information)	大学教育は「教えてもらう」ものではなく、学生が自分で学習するのを教員が「アシスト」するのだという原則を貫く。 課題レポートを提出しなかった者は単位付与付加とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	shinohara-masato@fukuchiya.ac.jp

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
観光総論(観光学)				中尾 誠二	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
本科目では、観光に関する基本的な知識を学習します。観光の基本概念、関連産業の概要、将来展望など幅広く講義を行います。					
</					

成績評価の方法と基準(Grading)		
評価方法	(割合)	評価基準
期末試験	(40%)	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している 良：おおよその説明はできており、かつ、問題点を理解している 可：しくみや問題点の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：しくみや問題点が説明できていない
講義ノート記載状況	(40%)	
受講態度	(20%)	
テキスト (Textbook)		【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		前田勇編著『新現代観光総論』ほか適宜紹介します
備 考 (Other Information)		講義後は毎回ノートを提出してもらうため、バインダー（ルーズリーフ）方式のノートを用意すること。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		研究室（4号館4F南側一番奥）前に掲示したTel/Mail等へ連絡もしくは在室時に直接面談

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
マーケティング(マーケティング論)				加藤 好雄	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
参考文献の序文では、「現在ではマーケティングは限られた業務を担った企業の1部門ではなく、全社をあげた事業活動である。マーケティングが企業のミッション、ビジョン、戦略策定を主導する。企業の全部門が目標達成のために協力して初めてマーケティングは成功するのである。」とある。このように、マーケティングは企業活動に不可欠であるが、先進的な自治体においてもマーケティングの基礎概念を取り入れた事業が行われてきている。授業で習得したマーケティングの概念や知識は、専門研究での調査・分析や就職した様々な業種の企業で役立つことになる。 本講義では、マーケティングで重要なSTP、マーケティング・ミックス（製品戦略・価格戦略・流通戦略・プロモーション戦略）、そして、ブランド戦略を体系的に学び、さらに、消費者行動論やマーケティング・リサーチの基礎的な概念・知識を学ぶことでマーケティングへの理解を深める。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
本講義では、以下の4点の知識・能力を習得することを目的とする。 ①マーケティングの概念・用語・知識を体系的に理解している。 ②消費者行動論の基礎的な概念を理解している。 ③調査の基礎的な手法の知識を理解している。 ④マーケティング戦略を、適切な用語を用いて説明することができる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス+マーケティングの基礎概念				
第 2 回	STP ①（セグメンテーションとターゲティング）				
第 3 回	" ②（ポジショニング）				
第 4 回	マーケティング・ミックス①（製品戦略）				
第 5 回	" ②（価格戦略）				
第 6 回	" ③（流通戦略）				
第 7 回	" ④（プロモーション戦略）				
第 8 回	ブランド戦略				
第 9 回	消費者行動論（消費者行動とマーケティング）				
第 10 回	マーケティング・リサーチ				
第 11 回	小テスト①+今までの復習				
第 12 回	ケースにおける課題解決の手法①（マーケティング・流通）				
第 13 回	ケースにおける課題解決の手法②（マーケティング・流通）				
第 14 回	ケースにおける課題解決の手法③（マーケティング・流通）				
第 15 回	小テスト②+今までの復習				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
基礎概念・用語・知識は講義によって学ぶが、理解を深めるためにマーケティング戦略の事例研究としてケース・スタディを行う。このため指定した事例を予習をしておくこと。また、小テストと期末試験を行うので、テキストや講義時に配布した資料の復習は必ず行うこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (40%) 小テスト×2回 (60%)	秀：「授業の到達目標」を非常に高いレベルで満たしている。 優：「授業の到達目標」を高いレベルで満たしている。 良：「授業の到達目標」を十分に満たしている。 可：「授業の到達目標」を満たしている。 不可：「授業の到達目標」を満たしていない。
テキスト (Textbook)	【書 名】 ケースに学ぶマーケティング 【著 者】 青木幸弘 [編] 【出版社】 有斐閣 【出版年】 2015年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	【書 名】 コトラー & ケラーのマーケティング・マネジメント 第12版 【著 者】 フィリップ・コトラー、ケビン・レーン・ケラー 【出版社】 ビアソン・エデュケーション 【出版年】 2008年
備 考 (Other Information)	他の経営学の関連科目の履修をすることが望ましい。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	第1回目の講義で説明する。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
ヘルスツーリズム論				芦田 信之	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義・フィールドワーク	無	無
授業の概要(Course Description)					
健康への関心の高まりの中、生活習慣病の治療として運動療法が取り入れられ、健康の維持増進のための運動教室が広く行われている。一方、余暇としての観光も見学型から、スポーツツーリズムや癒しをもとめる旅など体験型へと多様性が増している。これらの流れを結びつけ、地域の活性化策としてのヘルスツーリズムが各地で開催されるようになった。本授業では、地域にある観光資源を見つけ出し、医学的根拠に基づいた観光メニューを作成し、ヘルスツーリズム商品開発のしくみを学習する。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
ニューツーリズムの中のヘルスツーリズムの概念を理解し、地域の観光資源を探索する方策を知る。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	ヘルスツーリズムの概念と社会的背景				
第 2 回	ヘルスツーリズムの形態 運動・栄養・休養 運動療法				
第 3 回	医学的根拠 健康とは何か バイタルサイン 心拍・呼吸・血圧・体温				
第 4 回	医学的根拠 健康とは何か リラクゼーション 自律神経				
第 5 回	医学的根拠 体力 循環器・筋力・エネルギー				
第 6 回	登山の効用 体力測定とボルゴの指標				
第 7 回	大江山一斉登山 参加 フィールドワーク				
第 8 回	大江山一斉登山 参加 フィールドワーク				
第 9 回	ヘルスツーリズムと観光資源開発				
第 10 回	里山と着地型観光				
第 11 回	観光資源としての里山登山				
第 12 回	経費算出の方法とニーズ調査				
第 13 回	里山登山の体験 フィールドワーク				
第 14 回	里山登山の体験 フィールドワーク				
第 15 回	フィールド調査データのまとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
授業計画に書かれている各回のテーマを確認し、必要な予習・復習をすること					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末レポート (30%) 講義内のレポート (40%) フィールドワークレポート (30%)	秀：要求された程度を超えて優秀な成績。基準点として90～100点 優：要求にふさわしく優れた成績。基準点として80～89点 良：要求をみたす成績 基準点として70～79点 可：単位取得を認める合格最低ライン。 基準点として60～69点 不可：合格最低ラインに達しない成績。 基準点として59点以下
テキスト (Textbook)	【書名】 特になし。毎講義で資料を配布する 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	参考図書 ブルーバックス 山に登る前に読む本 9784062578776 800P 講談社 他、配布資料にて指示する。
備 考 (Other Information)	大江山一斉登山（5月27日）への参加、福知山近郊の山への登山参加
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	講義終了時またはメールにて質問や相談日時を受け付ける。メールアドレス：ashida-nobuyuki@fukuchiyama.ac.jp

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
環境学				矢口芳生 / 中尾誠二 / 塩見直紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
自然科学・人文科学・社会科学の知見を人間の生活との関係において講じ、人間の生活を取り巻く自然・地域・地球環境の密接な関係を明らかにし、人間と自然・環境との共生の必要性について学ぶ。					
講義で具体的に扱う内容は、地球温暖化・酸性雨・オゾン層破壊等の地球環境問題、公害・環境汚染問題、ごみ・水問題、企業の環境経営、環境教育等に及ぶ。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
自然科学・人文科学・社会科学の知見を総合的に応用し、生活のあり方を再考することにより、人間の生活を取り巻く自然・地域・地球環境との密接な関係に支障を生じさせないようにすることの重要性を理解するとともに、人間と自然・環境との共生の必要性について理解できるようにする。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	はじめに (矢口)				
第 2 回	地球環境、何がどう問題？ (矢口)				
第 3 回	公害と環境汚染 (矢口)				
第 4 回	地球温暖化の科学と政治 (矢口)				
第 5 回	小括 (矢口)				
第 6 回	酸性化する大気と海洋 (塩見)				
第 7 回	石油は40年でなくなるのか？ (塩見)				
第 8 回	オゾン層破壊がもたらすこと (塩見)				
第 9 回	生態系の危機 (塩見)				
第 10 回	小括 (塩見)				
第 11 回	あふれるごみ (中尾)				
第 12 回	水の危機の時代 (中尾)				
第 13 回	企業と環境経営 (中尾)				
第 14 回	環境教育の目指すもの (中尾)				
第 15 回	小括 (中尾)				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
① 各回の講義内容について事前に予習をしておくこと					
② ニュースや新聞に絶えず目を向けておくこと					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
毎回配布する授業シート (50%) 小括時々の試験 (50%)	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している 良：おおよその説明はできており、かつ、問題点を理解している 可：しくみや問題点の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：しくみや問題点の説明できていない
テキスト (Textbook)	【書名】 新訂 地球環境の教科書10講 【著者】 九里徳泰・左巻健男・平山明彦 【出版社】 東京書籍 【出版年】 2014
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	適宜紹介する
備考 (Other Information)	3分の1以上 (6回以上) の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	各担当教員の研究室前に掲示したTel/Mail等へ連絡もしくは在室時に直接面談

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
非営利組織論				杉岡 秀紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要(Course Description)					
1998年に議員(市民)立法で成立した特定非営利活動促進法(NPO法)の施行から約20年の歳月が経ち、日本におけるNPO法人数は5万団体を超えた。確かに数だけで見れば、NPOは、政府セクター、企業セクターに次ぐ第三番目のセクターになり得た感がある。しかし、財政面やマネジメント面も含め、まだまだ組織及びセクターとして克服すべき課題が山積している。 そこで、本講義ではNPOや公益財団等含む非営利組織に着目し、学びを深める。そして、可能な限り北近畿地域の非営利組織の第一線で活躍するゲストも招聘しながら、実際のNPOの事例や課題について見聞できる機会も作りたい。 なお、講師は、自らNPOを立ち上げたことがあるほか、現在も多くのNPOで理事や幹事を務めているそういった意味から机上の空論ではなく、現場から抽出されたエッセンスも伝えていきたい。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
以下の知識・スキルを体得することを到達目標とする。 ・グローバル化する世界と地域社会の関係を理解できる。 ・対象となる課題群の相互関係を把握し分析することができる。 ・地域社会における様々な活動と、活動をなう主体との関係の実践的把握ができる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス(自己紹介、講義の概要、NPOとは何かなど)				
第 2 回	NPOと法・立法過程				
第 3 回	NPOとボランティア				
第 4 回	NPOと協働				
第 5 回	NPOとソーシャルビジネス				
第 6 回	NPOの雇用、人的資源管理				
第 7 回	NPOのマーケティング・マネジメント				
第 8 回	NPOとインターメディアリとアドボカシー				
第 9 回	NPOの評価				
第 10 回	NPOとプロボノ				
第 11 回	NPOと寄付				
第 12 回	事例研究(1)				
第 13 回	事例研究(2)				
第 14 回	事例研究(3)				
第 15 回	まとめ、ふりかえり				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
・予習としては、参考図書を読んでおくことが望ましい。 ・復習としては、毎回配布するレジュメをしっかりと読みなおし、理解を深めること。 ・またペアワークやグループワークはトピックなテーマを取り上げるため、ニュースや地元新聞に絶えずチェックしておくこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
出席点 (15%) 小レポート (15%) 授業態度・講義への貢献 (10%) 期末レポート (60%)	秀：講義で習った概念を自分の言葉で論理的かつ客観的に説明でき、かつ課題点も指摘することができる。また、自学自習や実践につなげている。 優：講義で習った概念を自分の言葉で論理的かつ客観的に説明でき、かつ課題点も指摘することができる。 良：講義で習った概念を理解でき、他者に一部説明することができる。 可：講義で習った概念を最低限理解している。 不可：講義で習った概念を理解できていない。
テキスト (Textbook)	特になし。講義内に配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	山内直人『NPO入門』(日本経済新聞社、1999)、山本啓・雨宮孝子・新川達郎編著『NPOと法・行政』(ミネルヴァ書房、2002)、NPOと行政の協働の手引き編集委員会『NPOと行政の行動の手引き』(社会福祉法人大阪ボランティア協会、2004)、田尾雅夫『実践NPOマネジメント』(ミネルヴァ書房、2004)、岡村栄一・菅井直也・斐鹿ふみ子編『学生のためのボランティア論』(社会福祉法人大阪ボランティア協会、2006)、早瀬昇・水谷綾・永井美佳・岡村こず恵他著『テキスト市民活動論?ボランティア・NPOから学ぶ』(社会福祉法人大阪ボランティア協会、2011)、杉岡秀紀編著『地域力再生とプロボノ』(京都政策研究センターブックレット vol.3)』(公人の友社、2015)、きょうとNPOセンター編『NPO最善線』京都新聞社、2018発刊予定
備考 (Other Information)	・本講義は、毎回ペアワークやグループワーク実施し、学びの双方向性を重視する(アクティブ・ラーニング)。完全な座学ではないため留意すること。 ・3分の1以上(6回以上)の欠席は、単位不可とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	Eメール (sugioka-hidenori@fukuchiyama.ac.jp) に連絡すること。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
歴史学				井口 和起	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要 (Course Description)					
「歴史とは何か」を論じて、古典的名著とされるイギリスの現代史家、E・H・カーの『歴史とは何か』（清水幾太郎訳・岩波新書・青D1）を読み込むことで歴史というものの根本的な問題について考えることにします。哲学者が歴史哲学を解くのではなく、卓越した歴史家が歴史の研究と叙述の経験を通じて論じたものですから、理解しやすい語り方になっています。とはいえ、古典を読み解くにはそれなりに努力が必要です。しかし、大学生になったのですから、古典的な著作を読むことの大切さと同時に楽しさを味わってほしいと考えています。 授業計画にあるとおり、この著作の全6章を各章2回に分けて読み進めます。そして中間でお互いの理解をめぐって意見交換します。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
私たちが何らかのかたちで日々接している歴史に関する情報への批判的・理性的な接し方の基礎を学び、歴史学の基本的な考え方で再認識できること。そのうえで、歴史学の考え方を基礎に歴史意識・歴史認識・歴史観などの言葉の意味を理解し、多面的な視点から歴史に関する自分の考えをまとめる能力を持つこと。そして現代世界を過去・現在・未来へつなげる歴史過程として把握できる歴史的思考に習熟することなどを旨とします。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス：この著作の意義と授業のねらい・進め方				
第 2 回	Ⅰ 歴史家と事実①				
第 3 回	Ⅰ 歴史家と事実②				
第 4 回	Ⅱ 社会と個人①				
第 5 回	Ⅱ 社会と個人②				
第 6 回	Ⅲ 歴史と科学と道徳①				
第 7 回	Ⅲ 歴史と科学と道徳②				
第 8 回	中間まとめ：理解できたこと出来なかったことをめぐって				
第 9 回	Ⅳ 歴史における因果関係①				
第 10 回	Ⅳ 歴史における因果関係②				
第 11 回	Ⅴ 進歩としての歴史①				
第 12 回	Ⅴ 進歩としての歴史②				
第 13 回	Ⅵ 広がる地平線①				
第 14 回	Ⅵ 広がる地平線②				
第 15 回	最終まとめ：古典から何を学んだか？				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
・授業で毎回指定するテキストの該当部分を予習しておくこと。 ・授業中に必ず質疑応答・意見交換を行うから、準備をしておくこと。 ・授業では毎回出席カードに授業に関する疑問・感想などを書いて提出してもらいます。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業中の討論への参加 (20%) 毎回提出カード記載内容 (20%) 最終レポート (60%)	秀：歴史の根本的な問題の枠組みを理解し、現代世界を過去・現在・未来へつなげる歴史過程として適切な例を引いて説明できる。 優：歴史の根本的な問題の枠組みを理解し、歴史上の重要な出来事について自分の認識とその根拠を説明できる。 良：自分がこれまで持ってきた歴史的イベントについての認識を再検討する作業を行った結果を説明できる。 可：授業の概要をほぼ理解できている。
テキスト (Textbook)	【書名】 『歴史とは何か』 【著者】 E・H・カー 【出版社】 岩波書店（岩波新書） 【出版年】 2016年第86刷発行
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	新版・『歴史のための弁明—歴史家の仕事—』（マルク・ブロック著・松村剛訳、岩波書店、2004年刊）
備 考 (Other Information)	
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	一覧表参照。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
流通システム論(小売サービス業論)				佐藤 充	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要 (Course Description)					
我々の生活は、多様なモノやサービスを購入することで成立する。これらの消費活動は、生産者から消費者までを結ぶ流通システムによって支えられている。現代社会において、流通システムを構成する卸売業や小売業は不可欠なものである。そして、日常生活に直結するものであることから、我々が暮らす地域の動向をも左右することとなっている。 本講義は、基本的な流通システムの仕組みや役割を学習するとともに、卸売業と小売業の事業形態やその実態について、具体的なデータや事例を通して理解することを目的とする。あわせて、地域における流通システムや商業空間の意義や問題点を議論・検討するものである。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
① 流通システムの全体像を理解し、卸売業や小売業の仕組みや役割を説明することができるようになる。 ② 卸売業や小売業が直面する問題を把握し、具体的な根拠に基づき、今後の在り方に関する展望や構想を提示することができるようになる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	イントロダクション 現代社会における流通システムの動向				
第 2 回	流通システムの仕組みと現状				
第 3 回	小売業の事業形態と機能				
第 4 回	小売業の発展プロセスとその理論				
第 5 回	我が国における小売業の成り立ちとその展開				
第 6 回	小売業態の動向と現況				
第 7 回	卸売業の事業形態と機能				
第 8 回	卸売業の発展プロセス				
第 9 回	卸売業の動向と減容				
第 10 回	マーケティングチャネルと流通系列化				
第 11 回	流通システムと情報化				
第 12 回	流通システムと国際化				
第 13 回	商店街とまちづくり				
第 14 回	我が国における流通政策の変遷				
第 15 回	全体のまとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
① 各講義の最後に、次回までの小課題と予習の範囲を指示する。 ② 講義前には、小課題に取り組むとともに、教科書の指定された範囲を読むこと。 ③ 講義後は、配布資料とノートを読んで復習すること。 ④ ニュースや新聞記事等に目を通し、流通システムに関する時事問題について、自らの意見を考えること。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (60%) 小課題 (30%) 講義での発言 (10%)	秀：概念やフレームワークを適切に用いて、事象の問題点を、論理的かつ客観的に説明でき、すぐれた解決策を提示できる。 優：概念やフレームワークを適切に用いて、事象の問題点を、論理的かつ客観的に説明でき、解決策を提示できる。 良：概念やフレームワークを用いて、事象の問題点についておおよその説明ができ、一応の解決策を提示できる。 可：概念やフレームワークを理解し、事象の問題点について最低限の説明ができる。 不可：概念やフレームワークを用いて、事象の問題点を説明できていない。
テキスト (Textbook)	【書名】 新版 ベーシック 流通と商業 現実から学ぶ理論と仕組み 原田英生・向山雅夫・渡辺達朗 【出版社】 有斐閣アルマ 【出版年】 2010年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	渡辺達朗ほか (2008) 『流通論をつかむ』有斐閣 ※その他については、適宜、参考文献を提示する。
備考 (Other Information)	講義に3分の2回以上出席しなければ定期試験は受験できません。講義中は、できるだけ、積極的な発言を求めます。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	配布するレジュメに記載された連絡先に連絡すること。

科目名称 (Course Title)				担当教員 (Instructor)	
地域防災論				福島 貞道	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
我が国は、その地理的、地勢的、気候的特性から季節感豊かな潤いのある国土を形成し、古くから自然の恩恵を享受してきた。 一方、そのような立地条件を有するが故に、地震、火山、台風等の自然の脅威に周期的に見舞われるという宿命を負っているのも事実である。このような脅威を社会では自然災害（或いは天災）と称し、人的災害と合わせてこれを防ぐための対策、いわゆる防災対策に取り組んでいるわけである。 この講義では、都市（或いは地域）を人のあらゆる活動の舞台として位置付け、都市政策の基本とすべき「安全・安心の都市づくり」の観点から、災害の要素を概括的に理解したうえで、防災という観点がどこまで意識されているかということ、人災という切り口から学ぶことによって、まちづくりにおける課題と総合的な災害対策の在り方に関する基礎的知識の習得を目指す。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
「都市」、「災害」の基本概念を理解し、災害要素に対する正しい知識と都市における総合的な防災対策に係るハード・ソフト両面からの施策と課題を、公共的観点から論じることのできる基礎的知識を習得する。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス（新たな視点から学ぶ）				
第 2 回	基本認識（１） 都市とは、災害とは				
第 3 回	基本認識（２） 天災と呼ぶもの、人災と呼ぶもの				
第 4 回	自然との共生の意味				
第 5 回	間違っている災害区分				
第 6 回	主な自然現象の形				
第 7 回	防災とは				
第 8 回	自然現象と災害（１）				
第 9 回	自然現象と災害（２）				
第 10 回	自然現象と災害（３）				
第 11 回	過去を知り、歴史に学ぶ				
第 12 回	行政の役割と責務				
第 13 回	防災を切り口としたまちづくり（ハード編）				
第 14 回	防災を切り口としたまちづくり（ソフト編）				
第 15 回	まとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
・ 講義で学んだことを、継続的にかつ反復的に復習すること。 ・ 平常において体感する地域の物理的環境等を意識するように心掛ける。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
平常点 (15%) レポート (15%) 定期試験 (70%)	秀：都市・災害の基本概念を理解し、ハード・ソフト両面から地域防災について論じることができる知識を有し、的確な問題点の指摘と総合的な観点に基づいた解決法の提案ができる。 優：都市・災害の基本概念を理解し、地域防災に関する問題点の指摘と解決法の提案ができる。 良：都市・災害、地域防災の基本概念が凡そ理解できている。 可：都市・災害、地域防災に関する最低限の理解ができている。 不可：都市・災害・地域防災に関する理解が一定の水準を満たしていない。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 ・ 特になし。 授業に際しレジュメを配布する。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	・ 適宜紹介する。
備考 (Other Information)	・ 6 回以上の欠席者は、定期試験の受験は認めない。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	・ メール等でアポイント

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
工業簿記Ⅰ (簿記演習Ⅰ/会計実務Ⅰ)				井上 直樹	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要 (Course Description)					
工業簿記は、製造業の経営活動を複式簿記により記録・計算し、その結果を明らかにすることが中心となる。会社の資産、負債、純資産の増加・減少を記録・計算し、それらを財務諸表へ表示することが主目的である点は商業簿記と同じであるが、工業簿記は、経営内部活動としての製造活動から生じる様々な取引の記録・計算が含まれる点に特徴がある。 本講義では、製造業における工業簿記を主な対象としているが、営利・非営利、業種などを問わず、各主体における主に製造活動上の問題や課題の発見につなげることを目的とする。また、問題や課題解決のために、製造原価情報を適切かつ的確に収集・分析することを旨とする。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
工業簿記・原価計算の基礎的理解と記帳ができる。 工業簿記の理解や分析は、自分の手を動かしてようやく身に付くものであるため、特に、日商簿記検定試験を受験する学生は、講義外において、できるだけ多くの問題を解く必要がある。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンスと工業簿記の全体像				
第 2 回	工業簿記のしくみ				
第 3 回	材料費計算				
第 4 回	労務費計算				
第 5 回	経費計算				
第 6 回	製造間接費計算				
第 7 回	部門費計算				
第 8 回	個別原価計算				
第 9 回	総合原価計算 (1)				
第 10 回	総合原価計算 (2)				
第 11 回	直接原価計算 (1)				
第 12 回	直接原価計算 (2)				
第 13 回	製品の受払い、営業費計算、工場会計の独立				
第 14 回	総合問題演習と解説				
第 15 回	これまでの内容のまとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業ごとに前回授業内容に関する小テストを実施するため、毎回1時間程度の復習をしておくこと。 次回講義の予習として、テキストの該当箇所を1時間程度事前に読んでおくこと。 実際に仕訳をノートに書き、電卓を使って問題を解くことが、工業簿記の理解と上達につながる。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (80%) 講義中の小テスト (10%) 授業態度 (10%)	秀: 100点 - 90点 優: 89点 - 80点 良: 79点 - 70点 可: 69点 - 60点 不可: 59点 - 0点
テキスト (Textbook)	【書名】 検定簿記講義/2級工業簿記 【著者】 岡本清ほか 〔平成30年度版〕 【出版社】 中央経済社 【出版年】 2018
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	必要に応じて、講義で配布するレジュメで指示する。
備考 (Other Information)	・講義には、テキストおよび電卓(12桁以上、大きさ: 10cm×15cm以上のものが望ましい)を携行すること。 ・私語厳禁を徹底する。 ・授業の進捗等を判断し、授業計画を変更する場合がある。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メールによる予約。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
「持続可能な社会」論 (アドバンスド演習Ⅱ)				矢口 芳生	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講 無
授業の概要(Course Description)					
「持続可能性」・「永続可能性」・「持続可能な社会」という言葉は、一般的に定着し何気なく使われている。しかし、これらの言葉の意味するものは非常に奥深くかつ歴史ある大きな概念である。1970年代前半に世界の政治と経済が大きく転換するが、これと軌を一にして歴史上に現れる。以後、意味する内容や具体的な方策等が深められ、国際政治経済および地域社会を考える上での重要なキーワード・キーコンセプトとして今日に至っている。 講義では、「持続可能な発展」理念、それに基づく地域社会の見方、「持続可能な社会」のあり方、理念の実践過程・歴史的展開過程、地域社会における理念の実現方法等について、テキスト『持続可能な社会論』を用いて講じる。					
世界・日本・地域の政治・経済・社会の状況を理解し、「持続可能な発展」理念を踏まえて、地域課題を改善・解決することに大きな関心をもつようにするため、次の2点を到達目標にする（基礎知識の獲得と応用）。 1. 日本と世界の社会の状況を理解し、「持続可能な社会」に関する用語を用いて説明できるようにする。 2. 「持続可能な発展」理念を理解し、地域社会のニーズを把握し、討議できるようにする。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション、「持続可能な発展」の理念				
第 2 回	「持続可能な発展」理念の展開過程				
第 3 回	「持続可能な社会」への条件				
第 4 回	「持続可能な社会」のデザイン				
第 5 回	(小テスト)				
第 6 回	持続可能性の確保の課題				
第 7 回	科学技術と経済の課題				
第 8 回	社会に不可欠な「持続可能な農林業」の課題				
第 9 回	生活の質の向上と格差の是正の課題				
第 10 回	(小テスト)				
第 11 回	パラダイム転換の意義				
第 12 回	「共生」理念の指針				
第 13 回	「共生」への契機				
第 14 回	共生社会システムの可視化と成立条件				
第 15 回	(小テスト)				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
1. 指定したテキストは事前に必ず読んでおくこと。テキスト『持続可能な社会論』に注記した参考文献にも挑戦しよう。 2. 自分の住んでいる地域やアルバイト先の人々と話す機会をつくり、様々な課題や問題の解決方向について考えてみよう。					

評価方法 (割合)	評価基準
小テスト、第1・2回 各30点 第3回 40点 計100点 (100 %)	3回の〈小テスト〉を実施。 〈小テスト〉の評価基準は次のとおり。 秀：設問に適切に答えている。 優：設問に答えている。 良：設問に答えていない箇所がある。 可：設問に答えていない箇所が多いが、最低限の水準を満たす。 不可：設問に答えていない。 出欠は取りません。必修なので出席してください。少なくとも講義に3分の2以上は出席しよう。
テキスト (Textbook)	【書名】 『持続可能な社会論』 【著者】 矢口芳生 【出版社】 農林統計出版 【出版年】 2018年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	参考書や資料等は適宜講義で提示する。
備 考 (Other Information)	講義中にノートをとること。講義中の私語・飲食は慎むこと。 講義室で帽子はかぶらないこと。講義中に無断で退出しないこと。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	研究室前に掲示したTel/Mail等へ連絡 もしくは在室時に直接面談。

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
農業経営論(農林業・農村振興論)				塩見 直紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
この授業は、日本における農業経営の現状と動向、農業経営における手法、戦略等を先進例、若手農業系ベンチャーや新しい潮流に学んでいく。地域資源活用、新しい組み合わせ、コンセプトメイク、ブランディング、情報発信等なども重要なキーワードとして、一般の企業経営においても応用可能な内容とし、考え方や方法の理解が深まるように事例紹介も含め講述する。最終日には、自らが農業系ベンチャーを企画するをテーマに各自プレゼンをおこなう。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
・ 農業や農業経営の現状と課題について基本的な知識を修得する。 ・ 経営センス、農業経営の在り方、戦略等を学ぶ。 ・ 地域資源（地域資源創出）を活かした農業ベンチャー経営独自戦略プランを立案できる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	農業経営論の概要とめざす方向性について（オリエンテーション）				
第 2 回	若手農業ベンチャーに学ぶ農業経営、可能性、そして未来 (1) 日本事例				
第 3 回	若手農業ベンチャーに学ぶ農業経営、可能性、そして未来 (2) 京都府内事例				
第 4 回	若手農業ベンチャーに学ぶ農業経営、可能性、そして未来 (3) 北近畿事例				
第 5 回	農業経営の動向と現状 (1)				
第 6 回	農業経営の動向と現状 (2)				
第 7 回	農業経営の動向と現状 (3)				
第 8 回	農業ベンチャーワークショップ（個別プレゼンテーション準備）				
第 9 回	先進的農業経営の事例 (1)：家族経営				
第 10 回	先進的農業経営の事例 (2)：IT×農業				
第 11 回	先進的農業経営の事例 (3)：企業の農業参入				
第 12 回	次世代農業経営の展望 (1) オーガニックトレンド（環境時代対応）				
第 13 回	次世代農業経営の展望 (2) CSA（地域との関係性）				
第 14 回	次世代農業経営の展望 (3) エネルギー兼業（組み合わせ戦略）				
第 15 回	個別プレゼンテーション（農業ベンチャー構想）				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
・ 農業のあり方や農業系ベンチャー等の存在について、日ごろから問題意識をもつこと。 ・ 農業系ベンチャーを自分も立ち上げるという気概をもち、関連書を手にするなど、自己学習をおこなうこと。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (60%) 毎回の感想・気づき・提案シート (20%) 個別最終プレゼン (20%)	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、課題や独自の解決策を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、課題を理解し、解決策を提示できる 良：おおよその説明はできている、かつ、課題を理解している 可：課題の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：課題が説明できていない
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	毎講義のレジュメの中で、適宜、参考文献を紹介する
備考 (Other Information)	3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする。※1回目の授業も5回の欠席に含むので注意
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メール (conceptforx@gmail.com) で連絡

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
数学基礎 I				三品 勉	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	有 (名) ・ 無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
数学の応用分野は極めて広く、少なくとも高校で学んだ基礎数学は大学生として知っておくべき基本知識である。社会に出てその必要性を感じ、その時点で新たに学び直すこともできる。しかし学修効率の面で大きな障害があり勧められない。 本講義では経済学を事例として取り上げ、経済学を理解する上で身につけておくべき必要な数学を解説する。経済理論の範囲は多岐にわたるが、最もポピュラーな理論を数点選び、モデル構築の考え方、またその具体的な運用などについて説明する。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
(1) 高等学校で習得した数学に関する知識を使いこなすことができる。 (2) 大学生として知っておくべき新たな数学知識を理解することができる。 (3) 大学での他の授業に必要な数学的概念を運用することができる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション				
第 2 回	市場メカニズム		1次関数		
第 3 回	同上				
第 4 回	金利		指数・対数		
第 5 回	同上				
第 6 回	貯蓄		数列		
第 7 回	同上				
第 8 回	まとめと第 1 回テスト				
第 9 回	利潤最大化		1変数の微分		
第 10 回	同上				
第 11 回	効用最大化		多変数の微分		
第 12 回	同上				
第 13 回	リスク		確率		
第 14 回	同上				
第 15 回	まとめと第 2 回テスト				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業で学んだテーマについて、関連の問題を必ず解いておくこと。問題はその都度指示する。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業内試験 (100 %) 授業参加 (α %)	第 1 回・第 2 回テストの平均 (授業内試験の 70 %) 小テスト (授業内試験の 30 %) 議論・質問・コメントによる授業への参加回数 (追加点)
テキスト (Textbook)	【書名】 特になし 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	必要に応じて指示する
備考 (Other Information)	クラスは最大60人を限度とする。もし多数の受講希望者がいるときは、受講意欲を示すレポートを提出してもらうことがある。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	Eメール

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
地域資源論(地域経済論)				谷口 知弘	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2単位	2年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要(Course Description)					
20世紀に構築された大量生産、大量消費、大量廃棄型の社会経済システムは、経済成長を成し遂げ物質的な豊かさを生み出す一方、天然資源の枯渇や環境破壊等、地球規模での持続可能性の危機を招きつつある。日本においては先述の危機に加え、少子高齢や人口減少、東京一極集中、地方と大都市の経済格差、世代間格差など重大な問題に直面している。 地域資源論では、これらの問題解決のための理論と手法について地域資源を活用した地域づくりに焦点を当て講究する。持続可能な地域社会を実現するための地域資源の保全や活用について事例を通して学び、その重要性や可能性について理解を深めるとともに、施策や事業を企画する理論と手法を身につける。 尚、授業の進め方として、地域資源の保全・活用の最前線で活躍する方々をゲストに招き、実践者との対話から検討するとともに、先進事例に関する受講者の報告をもとに討論する時間を設けることとする。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
①地域資源を活かした持続可能な地域づくりの理論と手法を理解する。 ②京都府北部地域における地域資源の特性について理解する。 ③地域資源の保全と活用の施策や事業を企画する際に必要な理論と手法を身につける。					
授業計画(Course Schedule)					
第1回	導入：本講義の進め方と地域資源論の全体像 ワークショップ：地域社会の魅力と課題を語ろう				
第2回	第1部：地域資源を理解するための理論 ①地域資源の分類と地域社会				
第3回	" ②内発的発展論				
第4回	" ③地元学				
第5回	第2部：地域資源活用の実践と手法 ①文化的資源の活用1-歴史的資源と観光 (文化的景観、郷土芸能)				
第6回	" ②文化的資源の活用2-社会的資源と住民自治 (ソーシャル・キャピタル)				
第7回	" ③自然資源の活用1-地域の自然エネルギー活用				
第8回	" ④自然資源の活用2-森・里・川・海の つながりを活かした事業				
第9回	" ⑤人的資源の活用-高齢者や主婦の知恵と経験を 活かした事業				
第10回	" ⑥特産的資源の活用-山や海の恵みを 活かした事業				
第11回	第3部：先進事例の報告と討論 ①観光・交流				
第12回	" ②福祉・地域づくり				
第13回	" ③移住・雇用促進				
第14回	" ④農・食・アート				
第15回	まとめ：埋れし地域資源を社会とつなぐ ワークショップ：活用のアイデアを語ろう				

授業時間外学習(Supplementary Activities)	
①第1部、第2部は、講義のテーマに関して事前に理論や実践事例、手法などを調べておくこと。 ②第3部は、個人またはグループで分担して先進事例の報告を行うため報告の準備をしておくこと。	
成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
クラスへの貢献(50%) 期末レポート(50%)	秀：適切な課題を設定し、独創的且つ実現性の高い課題解決策を提示できている。 優：適切な課題を設定し、すぐれた課題解決策を提示できている。 良：課題を設定し、一応の課題解決策を提示できている 可：課題設定と解決策の提示が、いずれも最低限の水準を満たしている。 不可：課題設定や解決策の提示が水準に達していない。
テキスト (Textbook)	特になし
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	講義で配布するレジュメで指示する
備考 (Other Information)	・3分の1以上(6回以上)の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	taniguchi-tomohiro@fukuchiyama.ac.jp (谷口)

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
地方自治論				杉岡 秀紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
1993年の地方分権推進の決議から始まった地方分権の流れは、2000年の地方分権一括法の施行をもって結実したかに見える。確かにこの分権改革により、まさにこれまでの「官治・集権」の時代から、「自治・分権」の時代に入った。しかし、この分権改革とはいわゆる団体自治主導の分権の議論が主であり、我々はもっと住民自治主導の地方自治のあり方について議論をしなければならない。それが今日の中央集権的な地方創生への反省や解決策にも通じるヒントとなる。 そこで、本講義では、地方自治の歴史や法における地方自治の理解から始まり、様々な地方自治を取り巻く多くのトピックを学習していく。 なお、講師は、行政（国）で働いた経験もあり、現在も国・広域自治体・基礎自治体様々な政策に深く関与している。そういった意味から机上の空論ではなく、現場から抽出されたエッセンスに照射して、講義を進める。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
以下の知識・スキルを体得することを到達目標とする。 ・グローバル化する世界と地域社会の関係を理解できる。 ・対象となる課題群の相互関係を把握し分析することができる。 ・地域社会における様々な活動と、活動をになう主体との関係の実践的把握ができる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス（講義の概要、地方自治とは何か）				
第 2 回	憲法と地方自治				
第 3 回	団体自治と住民自治				
第 4 回	地方分権と地域創生				
第 5 回	市町村合併と道州制				
第 6 回	計画行政と総合計画				
第 7 回	自治基本条例とは何か				
第 8 回	二元代表制と議会改革				
第 9 回	行政改革と行財政				
第 10 回	地方公務員と人材育成				
第 11 回	新しい公共と協働				
第 12 回	人口問題と地域コミュニティ、関係人口				
第 13 回	事例研究①（基礎自治体）				
第 14 回	事例研究②（広域自治体）				
第 15 回	まとめ、ふりかえり				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
・予習としては、参考図書を読んでおくことが望ましい。 ・復習としては、毎回配布するレジュメをしっかりと読みなおし、理解を深めること。 ・またペアワークやグループワークはトピックなテーマを取り上げるため、ニュースや地元新聞に絶えずチェックしておくこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
出席点 (15%) 小レポート (15%) 授業態度・講義への貢献 (10%) 期末レポート (60%)	秀：講義で習った概念を自分の言葉で論理的かつ客観的に説明でき、かつ課題点も指摘することができる。また、自学自習や実践につなげている。 優：講義で習った概念を自分の言葉で論理的かつ客観的に説明でき、かつ課題点も指摘することができる。 良：講義で習った概念を理解でき、他者に一部説明することができる。 可：講義で習った概念を最低限理解している。 不可：講義で習った概念を理解できていない。
テキスト (Textbook)	特になし。講義内に配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	真山達志・今川晃・井口真『地域力再生と政策学』(ミネルヴァ書房、2010)、今川晃編『地域公共人材をつくる』(法律文化社、2013)、青山公三・小沢修司・杉岡秀紀・藤沢実『もうひとつの「自治体行革」』(京都政策研究センターブックレット vol. 2)』(公人の友社、2014)、白石克孝・石田徹編『持続可能な地域実現と大学の役割』地域公共人材叢書第3期第1巻(日本評論社、2014)、今川晃編『地方自治を問いなおす』(法律文化社、2014)、杉岡秀紀編著『地域力再生とプロボノ』(京都政策研究センターブックレット vol. 3)』(公人の友社、2015)、青山公三・小沢修司・杉岡秀紀ほか『地域創生の最前線』(京都政策研究センターブックレット vol. 4)』(公人の友社、2016)、青山公三・小沢修司・杉岡秀紀ほか『「みんな」でつくる地域の未来』(京都政策研究センターブックレット vol. 5)』(公人の友社、2017)、杉岡秀紀ほか編『合併しなかった自治体の実際』(公人の友社、2018)、牛山久仁彦ほか編『日本の自治と地域行政(仮)』(共著/華書房/2018年予定)
備考 (Other Information)	
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	Eメール (sugioka-hidenori@fukuchiyama.ac.jp) に連絡すること。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
統計学				三品 勉	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	有 (名)・無	科目等履修・聴講
授業の概要(Course Description)					
現代社会では数字に取り巻かれて生活している。数をより分かり易く理解し、説得力のある説明をするための手段の一つが統計学である。身の回りの数字を読み取り、意思決定に結びつける基礎的方法を学ぶ。数値データのまとめ方や客観的な活用技術は、これから学ぶ専門科目の理解、さらに社会に出てから必要なものとなる。不確実性を含むデータを一定の確実さをもつ情報に加工し、目的に応じて適切に扱う方法を説明する。本講義は文系学生のための統計学入門として位置づけており、単に手法を覚えるだけでなく、その背景となる考え方を中心に学ぶ。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
記述統計と推測統計の違いを理解し、必要に応じて適切にデータを処理することができる。平均値と分散といった数値の扱いができる。離散的・連続的確率分布を理解し、その関係を説明することができる。仮説検定の考え方を説明することができる。相関係数と回帰式を求めることができる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション データの性格を知る				
第 2 回	データの要約：平均と分散				
第 3 回	度数分布表の活用				
第 4 回	確率と集合				
第 5 回	確率分布：二項分布 ポアソン分布 正規分布 一様分布				
第 6 回	同上				
第 7 回	標本分布				
第 8 回	まとめと第1回テスト				
第 9 回	点推定と区間推定				
第 10 回	同上				
第 11 回	仮説検定				
第 12 回	同上				
第 13 回	多変量データの分析				
第 14 回	パソコンを使った統計処理				
第 15 回	総まとめと第2回テスト				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
前回学習した部分をよく復習しておくこと。新しい用語・考え方が多く出てくるが、理解の積み重ねが必要なので、不明な点は次回の授業までになくしておくこと。統計学が様々な分野で使われていることを日常生活で確認してほしい。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業内試験 (100 %) 授業参加 (α %)	第1回・第2回テストの平均 (授業内試験の70%) 小テスト (授業内試験の30%) 議論・質問・コメントによる授業への参加回数 (追加点)
テキスト (Textbook)	【書名】 統計学への招待 【出版社】 日本経営数学会 税務経理協会 【著者】 【出版年】 2018
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	必要に応じて指示する
備考 (Other Information)	特になし
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	Eメール

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
グローバル特別講義Ⅲ(公共経営演習Ⅲ)				杉岡 秀紀 / 谷口 知弘	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
本学は「市民の大学、地域のための大学、世界と共に歩む大学」を標榜し、2016年4月に開学した。そして、京都府北部の5市2町、兵庫県北部の5市2町を主たるフィールドの対象とし、地域の課題解決のために教育・研究・社会貢献を展開することとしている。 本講義においてそこでは、本学北近畿地域連携センター開学記念連続講演会にて共催頂いた北近畿地域内の自治体や本学の包括協定団体からトップリーダーを含む第一線のキーパーソンをゲストスピーカーとしてお招き、それぞれの立場から地域創生の取り組みの現状と課題について話題提供いただき、今後の地域協働型教育研究につなげるきっかけの機会とする。なお、原則として前半約60分はゲスト講義、後半約30分は質疑応答を含む対話の機会とする。また、本講義は北近畿地域連携センターとも共催し、北近畿地域の皆さんに公開する。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
公共を担う重要な主体である行政セクターや民による公共を担う民間セクターの多様な役割や重要性、具体的な姿を理解する。 北近畿管内の地域創生の取り組みの状況を認識し、その課題を把握する能力を養う。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス (講義の概要と北近畿地域の概要など)				
第 2 回	舞鶴市における地域創生の取り組み				
第 3 回	綾部市における地域創生の取り組み				
第 4 回	京丹後市における地域創生の取り組み				
第 5 回	宮津市における地域創生の取り組み				
第 6 回	与謝野町における地域創生の取り組み				
第 7 回	伊根町における地域創生の取り組み				
第 8 回	豊岡市における地域創生の取り組み				
第 9 回	朝来市における地域創生の取り組み				
第 10 回	篠山市市における地域創生の取り組み				
第 11 回	丹波市における地域創生の取り組み				
第 12 回	養父市における地域創生の取り組み				
第 13 回	地域金融 (北部信用金庫・但馬信用金庫) における地域創生の取り組み				
第 14 回	公共交通・観光 (JR西日本・海の京都DMO) における地域創生の取り組み				
第 15 回	大学連携 (京都工芸繊維大学・福知山公立大学) における地域創生の取り組み				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
予習：各回のテーマについて、文献やインターネットによる調査、自身の関心を整理するなどあらかじめ学習しておくこと。 復習：講義で得た気づきや成果をレポートにまとめること。 また、日常的に新聞を読むなど広く社会の動きに関心をもち、北近畿の公共政策に関わって関心や問題意識を高めること。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
出席及び意見交換の姿勢 (50%) 期末レポート (50%)	秀：行政セクター及び民間セクターの役割と各分野の事業内容を理解して、問題点を的確に指摘でき、かつ、問題解決の優れた政策を提示できる。 優：行政セクター及び民間セクターの役割と各分野の事業内容を理解して、問題点を的確に指摘し、かつ、問題解決の適切な政策を提示できる。 良：行政セクター及び民間セクターの役割と各分野の事業内容を理解して、問題点を的確に指摘できる 可：行政セクター及び民間セクターの役割と各分野の事業内容について、最低限の理解はできている。 不可：行政セクター及び民間セクターの役割と各分野の事業内容が説明できない。
テキスト (Textbook)	【著者】 【出版社】 【出版年】 ※特になし。授業で配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	・ 毎講義のレジュメの中で、適宜、参考文献を紹介する
備考 (Other Information)	・ 「グローバル特講Ⅳ」と合わせて履修することが望ましい。 ・ 福知山市や市内の3地域協議会の取り組みについては「地域経営演習Ⅰ・Ⅱ」「グローバル特講Ⅰ」で別に取り上げているため、本講義では取り扱わない。 ・ ゲストの方々の都合により、変更がありうるので掲示に注意すること。 ・ 3分の1以上 (6回以上) の欠席は、単位不可とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	・ sugioka-hidenori@fukuchiyama.ac.jp (杉岡)、 taniguchi@co-design.info (谷口)

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
中小企業論				佐藤 充	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
中小企業は、日本経済を支える基盤であるとともに、地域経済を牽引するものである。我が国では、大企業の下請企業や地域商業の小売・サービス店だけではなく、高度な技術力や独創的なビジネスモデルを有する革新的な中小企業が事業活動を展開している。さらに、新たな産業の担い手として、スタートアップ企業への期待も高まっているのである。 本講義は、中小企業概念や仕組みを学習するとともに、中小企業の実態や経営課題について、具体的なデータや事例を通して理解することを目的とする。あわせて、地域経済における中小企業の役割や問題点を議論・検討するものである。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
① 日本経済における中小企業の役割を理解し、中小企業を取り巻く経済環境や中小企業の経営について説明することができるようになる。 ② 中小企業が抱える諸問題を把握し、具体的な根拠に基づき、今後の在り方に関する展望や構想を提示することができるようになる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	イントロダクション 日本経済と中小企業				
第 2 回	中小企業とは				
第 3 回	日本における中小企業の変遷				
第 4 回	大企業と中小企業				
第 5 回	下請システムと中小企業				
第 6 回	グローバル化と中小企業				
第 7 回	中小企業の事業承継				
第 8 回	中小企業の研究開発活動とイノベーション				
第 9 回	スタートアップ企業の経営と支援				
第 10 回	中小企業と地域経済				
第 11 回	中小企業のネットワーク化				
第 12 回	情報化と中小企業				
第 13 回	中小企業の資金調達				
第 14 回	中小企業政策の展開				
第 15 回	全体のまとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
① 各講義の最後に、次回までの小課題と予習の範囲を指示する。 ② 講義前には、小課題に取り組むとともに、教科書の指定された範囲を読むこと。 ③ 講義後は、配布資料とノートを読んで復習すること。 ④ ニュースや新聞記事等に目を通し、中小企業に関する時事問題について、自らの意見を考えること。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (60%) 小課題 (30%) 講義での発言 (10%)	秀：概念やフレームワークを適切に用いて、事象の問題点を、論理的かつ客観的に説明でき、すぐれた解決策を提示できる。 優：概念やフレームワークを適切に用いて、事象の問題点を、論理的かつ客観的に説明でき、解決策を提示できる。 良：概念やフレームワークを用いて、事象の問題点についておおよその説明ができ、一応の解決策を提示できる。 可：概念やフレームワークを理解し、事象の問題点について最低限の説明ができる。 不可：概念やフレームワークを用いて、事象の問題点を説明できていない。
テキスト (Textbook)	【書名】 中小企業・ベンチャー企業論【新版】 植田浩史ほか 【出版社】 有斐閣コンパクト 【出版年】 2014年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	各講義のなかで、適宜、参考文献を提示する。
備考 (Other Information)	講義に3分の2以上出席しなければ定期試験は受験できません。講義中は、できるだけ、積極的な発言を求めます。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	配布するレジュメに記載された連絡先に連絡すること。

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
多文化共生論(異文化理解)				平野 真、矢口芳生、芦田信之 張 明軍、三品 勉、篠原正人	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
経済活動がグローバル化するなかで、外国との交流が不可欠な時代となってきた。一方では、政治情勢の不安定化や経済格差が広がり、保護主義的な風潮も広まってきた。言語、文化、価値観の違いを超えて交流するには、相手の立場を理解し、自分の立場を主張できる能力が必要である。様々な国や民族の文化・歴史・社会制度等の違いや多様性を理解し、多くの国々や人々と共生できる国際社会の実現を目指すため、留学および業務などの海外での生活・暮らし等、実際の滞在経験を基にした知識経験を踏まえた講義により国際感覚を養う。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
多文化共生について理解し、あるいは理解しようと努力する態度を身につけ、あるいは他者との差異を認識ができるようにすること（他者理解と自己理解）を目指す。海外での滞在経験を踏まえた現地での生活等の様子を数多く紹介することにより、留学や海外での業務上のことだけでなく、海外からの訪問者や留学生、長期滞在者等との国内での交流にも役に立つ知識や作法を身につける。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	多文化共生とは何か（矢口） オリエンテーション、グローバリゼーションと多文化共生				
第 2 回	マイノリティとマジョリティ				
第 3 回	多文化社会と社会統合のあり方				
第 4 回	多文化共生とは何か（芦田） 国際協力				
第 5 回	応用倫理学 国際倫理				
第 6 回	日本人から見た外国の暮らし（三品） 米国で暮らして気がついたこと				
第 7 回	米国の大学－留学を成功させるためのヒント				
第 8 回	日本人から見た外国の暮らし（篠原） 英国・オランダに住んで				
第 9 回	ヨーロッパと日本のビジネス文化				
第 10 回	日本人から見た外国の暮らし（平野） 米国での事業経験から				
第 11 回	中国・欧州での研究取材から				
第 12 回	外国人から見た日本の暮らし（張） 留学生の世界へ				
第 13 回	外国人市民とどう付き合うか				
第 14 回	多文化共生とインバウンド観光				
第 15 回	多文化共生に関する市民意識調査				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業計画に書かれている各回のテーマを確認し、必要な予習・復習をすること					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
担当者講義ごとに「授業感想シート」の提出（授業終了10分程度前に記入してもら）。各教員14点の持ち点とし、計98点、13回以上出席者に2点を加点。	授業感想シートについて次の評価とする 講義内容の理解 4 点、論旨の明快さ 4 点、その他（誤字・脱字、適切な句読点、その他評価者独自の加点事項、授業態度、等） 2 点、合計98点（14点×7人）。最後に13回出席者に2点を加点。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	適時プリントを配布する
備 考 (Other Information)	
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
グローバル特別講義Ⅲ(地方行財政)				福島 貞道	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
地方分権の推進とグローバル化が叫ばれて久しい今、各都市においては、それぞれの地域特性を活かした魅力ある都市形成(まちづくり)への取組が求められている。 真の地方分権下における政策の立案・具現化は、自治体とその都市その地域の住民等との協働による取組が極めて重要となる。この取組によるまちづくりは、各都市のアイデンティティの確立と魅力を向上させるとともに、ひいては観光立国を標榜する日本国の興行の深い多様な魅力の創造と発信に寄与することとなる。 この講義では、「景観」というキーワードを絡めながら都市を私達のあらゆる活動の舞台として位置付け、その都市、その地域の特性を活かしたまちづくりの実現のための手法と制度・仕組みを国の法制度との関わりの中で学び、広い視野と公共的観点から地方行政の在り方とその責務について論じることができる感性と制度運用等の基礎的能力の習得を目指す。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
「行政」、「景観」、「都市」の基本概念を理解し、それぞれの都市、地域における課題の収集と分析、解決のための基礎的能力を身に付け、受講者自らが、公共的感性の下に地方行政に参画するための基本的な知識と制度・仕組みの概念を習得し、自律的活動ができる職能人となることを目指す。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス及び公共政策としてまちづくりを学ぶ意義				
第 2 回	行政とは				
第 3 回	日本の風土、伝統、文化(まちづくりに対する基本的感性の源)				
第 4 回	景観という切り口(1) 風景の概念				
第 5 回	景観という切り口(2) 景観その意味するもの(景観の概念)				
第 6 回	魅力ある都市の形成(1) 景観から考えるまちづくり				
第 7 回	魅力ある都市の形成(2) 都市の役割と構成				
第 8 回	公共政策としての都市形成(1)(安全・安心と伝統・文化の継承)				
第 9 回	公共政策としての都市形成(2)(安全・安心と伝統・文化の継承)				
第 10 回	まちづくりに関わる法の体系と構成(1) 法制度の基本と主な関係法令				
第 11 回	まちづくりに関わる法の体系と構成(2) 地方分権型の法体系				
第 12 回	まちなみ保存政策の意義と手法				
第 13 回	住民主体のまちづくりのための制度・仕組み				
第 14 回	行政の役割と責務(地方行政の要諦)				
第 15 回	まとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
・ 講義で学んだことを、継続的にかつ反復的に復習すること。 ・ 平常において体感するすべての現象を意識して観るよう心掛けること。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
平常点 (15%) レポート (15%) 定期試験 (70%)	・秀:行政、景観、都市の基本概念を理解し、公共的観点からまちづくりを論じることができる知識、技量を有し、的確な問題点の指摘と、その解決のための法の制度・仕組みを提案することができる。 ・優:行政、景観、都市の基本概念及び公共的観点からまちづくりを考える意義を理解し、問題点の指摘とその解決のための手法を提示することができる。 ・良:行政、景観、都市の基本概念が凡そ理解できており、まちづくりに関する問題点の指摘とその公共的観点からの一応の解決策を提示できる。 ・可:行政、景観、都市の基本概念及びまちづくりに対する公共的観点からの問題点の把握と解決策の必要性について、最低限の理解ができています。 ・不可:行政、景観、都市の基本概念、まちづくりに関する基本的な理解等がいずれも最低限の水準を満たしていない。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 ・特になし。授業に際しレジュメを配布する。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	・適宜紹介する。
備考 (Other Information)	・6回以上の欠席者は、定期試験の受験は認めない。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	・メール等でアポイント

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
財務諸表論(財務会計論)				井上 直樹	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
財務諸表は、企業外部の利害関係者に対して会計情報を提供するために作成され、私たちが企業の経営状態などを知るために必要不可欠なものである。本講義では、企業が行っているさまざまな経済活動がどのように会計処理され、財務諸表上に表示されているかをその理論的背景について理解していくとともに、実際の財務諸表をもとにその分析方法についても学んでいく。 本講義では、企業の財務諸表を主な対象としているが、複式簿記にもとづく発生主義会計の考え方を理解することで、営利・非営利を問わず、各主体における財務会計上の問題や課題の発見につなげることを目的とする。また、問題や課題解決のために、財務会計情報を適切かつ的確に収集・分析することを旨とする。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
基本的な会計理論やわが国の会計制度について理解し、財務諸表の内容から企業の経営成績や財政状態を把握できる。上場企業等が開示している財務諸表を自らの目的に応じて利用できる。 財務諸表の理解や分析は、自分の手を動かしてようやく身に付くものであるため、特に、ビジネス会計検定試験®を受験する学生は、講義外において、できるだけ多くの問題を解く必要がある。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンスと財務諸表の全体像				
第 2 回	貸借対照表の構造と流動資産				
第 3 回	固定資産と繰延資産				
第 4 回	負債と純資産				
第 5 回	損益計算書の構造と売上総利益				
第 6 回	営業利益と経常利益				
第 7 回	税引前当期純利益と当期純利益				
第 8 回	キャッシュ・フロー計算書の構造				
第 9 回	キャッシュ・フロー計算書の読み方				
第 10 回	財務諸表分析の概要				
第 11 回	百分比財務諸表分析と成長性分析				
第 12 回	安全性分析				
第 13 回	キャッシュ・フロー情報の利用と収益性分析				
第 14 回	総合問題演習と解説				
第 15 回	これまでの内容のまとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業ごとに前回授業内容に関する小テストを実施するため、毎回1時間程度の復習をしておくこと。 次回講義の予習として、テキストの該当箇所を1時間程度事前に読んでおくこと。 実際に電卓を使って問題を解くことが、ビジネス会計の理解と上達につながる。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (80%) 講義中の小テスト (10%) 授業態度 (10%)	秀: 100点 - 90点 優: 89点 - 80点 良: 79点 - 70点 可: 69点 - 60点 不可: 59点 - 0点
テキスト (Textbook)	【書名】 ビジネス会計検定試験® 【著者】 大阪商工会議所 公式テキスト3級 【出版社】 中央経済社 【出版年】 2014
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	必要に応じて、講義で配布するレジュメで指示する。
備 考 (Other Information)	・ 講義には、テキストおよび電卓 (12桁以上、大きさ: 10cm×15cm以上のものが望ましい) を携帯すること。 ・ 私語厳禁を徹底する。 ・ 授業の進捗等を判断し、授業計画を変更する場合がある。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メールによる予約。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
地域文化論(北近畿学)				井口 和起	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要(Course Description)					
北近畿地域、特に福知山を中心に綾部・舞鶴・宮津などの博物館や史跡・施設・街角などを紹介しながら、地域の人々が自覚している文化資源を私たちが学ぶことから学習を始めます。そのために、先ずは地域の文化を調べる方法を学び、現地を訪れる前の徹底した事前学習の訓練を行います。そのうえで、実際に諸施設を訪問・見学し、そこでの人との対話を通じて地域の人々の文化への思いを理解し、共感できる感性を育みます。さらに進んで新しい文化の発見につながる文化論の展開へと進む予定です。諸施設見学などは主に自学・自習してもらうことになります。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
授業で取り上げた地域の代表的な文化資源の概要を知ること。実際に諸施設を訪問・見学したり、文化的行事に参画し、人びととつながり、交流し、その体験をまとめる能力を持つこと。現場に行く前の徹底した事前調査・事前学習の方法を習得すること。これらを通じて、地域とは何か、文化とは何かという問題に、既成観念から解放されて新たな視点から接近する意欲を持つこと、などを目標とします					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス：地域文化を発見する「まなざし」				
第 2 回	福知山城博物館―城下町：福知山―				
第 3 回	御霊神社と広小路―城下町から近代地方都市へ―				
第 4 回	「平和公園」に見える福知山の近代―陸軍と福知山―				
第 5 回	福知山生活衣館―生活文化と衣服―				
第 6 回	地方新聞から文化を探す―兩丹日日新聞記事から―				
第 7 回	福知山治水記念館―水害とたたかう文化―				
第 8 回	宮津・震災記念館と歌碑―北丹後大震災と語り継ぎ―				
第 9 回	山椒大夫の世界―海と川の文化―				
第 10 回	グンゼ資料館―綾部・近代製糸業が生んだ文化―				
第 11 回	田辺城・赤レンガ博物館と引揚記念館―西と東の舞鶴―				
第 12 回	福知山公立大学と地域文化を考える				
第 13 回	地域とは何かを考える―丹波と丹後と但馬―				
第 14 回	文化とは何かを考える―内側の思いと外からのまなざし―				
第 15 回	まとめ：地域文化発見を日ざす学習とは				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
授業で毎回指定する予習課題を学習しておくことが望ましいが、困難なこともあるので、復習に重点をおいて学習してほしい。各自が適切な時期・休日などを利用して指定した博物館や史跡・施設を見学することと、その見学報告も兼ねて授業の進行の中で適宜中間レポートの提出を要求するので、準備しておくこと。また、地方紙を活用して地域文化を見出す試みも行います。					

成績評価の方法と基準(Grading)			
評価方法 (割合)		評価基準	
授業中の討論への参加 (20%) 中間提出レポートの内容 (20%) 最終レポート (60%)		秀：徹底した事前調査・学習を踏まえて現地を訪れ、新しい発見の芽をふくむ報告を作製できる。 優：事前調査・学習を踏まえて現地を訪れ、自分の目で見た文化論を述べる事が出来る。 良：自分がこれまで持ってきた地域文化の既成観念から脱却して、地域の文化資源を新たな視点から探究できる。 可：授業で取り上げた地域の代表的な文化資源の概要を知って、自分の言葉で紹介できる。	
テキスト (Textbook)		【書名】 【出版社】 特になし。授業時に資料配布。参考資料も紹介	【著者】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		北近畿地域、特に福知山・舞鶴・綾部・宮津の各市史や地方紙記事。	
備 考 (Other Information)			
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		一覧表参照。	

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
政治学				富野 暉一郎	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
この講義は政治学の入門編です。私たちは毎日様々な政治に関する報道に接しています。でもいったい政治とは何なのでしょう。社会にとってなくてはならない政治ですが、私たちはその重要性について十分な認識を持っていないように見えます。この講義では、社会で起きている政治現象を参考にしながら、現代社会における政治の役割を、民主主義という政治システムを中心に考察します。講義の内容は、実際に社会で起きている現象や事件などを事例に取り入れながら、第二次世界大戦後の政治の対象の変遷、選挙と政治権力、直接民主主義と間接民主主義、権力の分立、政党政治の意義、地方自治、政治参加の諸形態、などを含めるものとなります。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
①現代社会における政治の役割について基礎的な知識を得る。 ②国民主権、市民主権の意味と成立過程を理解する。 ③市民の政治参加と民主主義の関係を理解する。 ④地方議員との直接対話を通じて、地方議員の社会的役割を再認識する。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	イントロダクション (この講義で学ぶこと)				
第 2 回	さまざまな政治形態、さまざまな政治のレベル				
第 3 回	第二次世界大戦後の日本の政治課題				
第 4 回	国家主権と国際社会				
第 5 回	国家主権と国民主権				
第 6 回	権力の抑制 (憲法、三権分立、世論)				
第 7 回	議院内閣制と大統領制				
第 8 回	日本の地方政治の特徴				
第 9 回	政党政治と市民社会				
第 10 回	民主主義におけるリーダーシップ				
第 11 回	政治と情報社会				
第 12 回	グループ討議I				
第 13 回	市長との対話				
第 14 回	グループ討議II				
第 15 回	人口減少時代における政治の役割				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
①次回の講義で学ぶテーマについて、指定された文献・資料等を読み込んでおくことを求めます。 (レポート提出を求めることがある) ②グループ討議及び市長との対話については、グループで役割分担を決めて事前学習をします。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (70%) レポート (3 回) (30%)	期末試験とレポートについては、①論点が明確に捉えられているか ②講義の内容に即しているか、③論旨に一貫性があるか、の3点について評価します。また自主的な学習の成果を盛り込んでいると認められるものについては、期末試験で10点以内、レポート3本の合計点に5点以内を加点します。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	『始めて学ぶ政治学』岡崎清輝・木村俊道編 ミネルヴァ書房 2014
備考 (Other Information)	3分の1以上(6日以上)の欠席は、単位不可とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	初回の講義で連絡方法を指示します。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
財政学				三好 ゆう	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修
授業の概要(Course Description)					
産業活動や国民生活に対し、財政は重要な影響をもたらす。あらゆる部面で複雑にかかわっているため、現代財政の制度を理解することは大変難しいものとなっている。本講義では、財政の全体像を見据えながら、現代財政のしくみや理論について各個別分野でそれぞれ丁寧に見ていく。 講義は大きく4つに分かれる。第1部「現代財政の全体像」では基礎理論とともに現代財政の構造について、第2部「租税の基礎理論と政策」では一般財政の収入源である租税について、第3部「財政赤字と公債」では公債の制度や理論、歴史について、第4部「財政の役割と課題」では主要経費について総合的に解説する。 日本の財政制度を中心に講義を進めていく。私たちの生活にどれほど密接に関わってきているのかを実感してもらえよう、分かりやすい説明を行う。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
本講義の目的は、現代財政の基礎的知識やしくみを把握し、自身の日常生活と財政との関わり合いを理解することにある。そのうえで、以下の2点を最終到達目標とする。 (1) 日本の財政のしくみについて、自分の言葉で論理的に客観的な説明ができるようになること (2) 日常生活における財政の役割を理解すること					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	第1部「現代財政の全体像」	大きな政府と財政機能			
第 2 回	"	予算原則と財政民主主義			
第 3 回	"	日本の財政システム			
第 4 回	第2部「租税の理論と政策」	租税の基礎理論			
第 5 回	"	所得税のしくみと理論			
第 6 回	"	法人税のしくみと理論			
第 7 回	"	付加価値税の理論			
第 8 回	"	シャウプ勧告と租税体系			
第 9 回	"	税制改革の動向			
第10回	第3部「財政赤字と公債」	公債の制度と日本の公債問題			
第11回	第4部「財政の役割と課題」	社会保障と財政構造			
第12回	"	国防・ODAの財政			
第13回	"	環境問題と財政			
第14回	"	災害対策と財政			
第15回	総まとめ 財政の自立と連帯				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
①テキストを活用し、次回講義内容の確認をしておくこと。分からない用語・単語等は事前に調べておくか、チェックをしておくこと。 ②毎講義の復習は、レジュメの他、参考書等を活用し、理解を深めておくこと。 ③ニュースや新聞に絶えず目をむけておくこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (100%)	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している 良：おおよその説明はできており、かつ、問題点を理解している 可：しくみや問題点の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：しくみや問題点の説明できていない
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 ※講義は、主として、レジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	内山昭編 (2014) 『財政とは何か』税務経理協会
備 考 (Other Information)	
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	週2コマをオフィスアワーとする（事前連絡は不要） 具体的な曜日・時間については、オフィス前に掲示しておく

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
プログラミング I				神谷 達夫	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
前学期	2 単位	1 年次	講義	有 (15名)	科目等履修・聴講
授業の概要(Course Description)					
この講義は、プログラミングの基礎を習得することを目的としている。プログラミングは、コンピュータに対して動作を指示するためのプログラムを作成する行為である。 本講義で取り扱う言語はPythonである。このプログラミング言語は、近年用いられることが多く、習得することによって研究データ等の処理に役立つと思われる。 この講義では、初めてプログラミングを経験する者を対象に、Pythonを用いて簡単なプログラムが作成できるようになることを目指している。前半でPythonの基本的な文法を解説し、後半はデータ処理に必要な事項とプログラムのデバッグに必要な知識を取り扱う。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
プログラミング言語Pythonの基礎を習得し、自分で簡単なプログラムを作ることができるようになる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション	講義の進め方と講義の概要説明			
第 2 回	動作環境の構築	Pythonインタプリタの動作確認			
第 3 回	変数とデータ構造	リテラル、変数宣言、リスト、辞書			
第 4 回	ファイルからの実行	エディタの操作、Pythonスクリプトの作り方			
第 5 回	制御構造の基本	繰り返しと条件分岐			
第 6 回	制御構造を使ったプログラミングの練習				
第 7 回	モジュールの利用	モジュールの読み込みと作成			
第 8 回	日本語の取り扱い	文字コードの種類、エンコードとデコード			
第 9 回	ファイル操作	ファイルのオープン、読み込み、書き込み			
第 10 回	データの読み込み	CSVファイル、TSVファイルの操作			
第 11 回	フィルタとパイプライン	フィルタプログラムの作成			
第 12 回	エラーとトレースバック	トレースバックを使ったデバッグ			
第 13 回	デバッグの使用方法	pdbデバッグの使い方			
第 14 回	テストとアサーション	プログラムのテスト方法			
第 15 回	まとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
プログラミングできるようになるには、授業以外でもプログラムを作成することが重要である。帰宅してからでもプログラムが作成できるような環境を用意し、自分で作ったプログラムを実行することが理解への近道である。					

成績評価の方法と基準 (Grading)			
評価方法	(割合)	評価基準	
期末試験 レポート・課題提出	(60%) (40%)	秀：講義で扱ったプログラミングの知識とその応用方法を論理的に説明でき、その知識を応用できる 優：講義で扱ったプログラミングの知識とその応用方法を論理的に説明できる 良：おおよその説明はできており、かつ、簡単なプログラムは作ることができる	
テキスト (Textbook)		【書名】 いちばんやさしい Python入門教室 【出版社】 ソーテック社 【著者】 大澤 文孝 【出版年】 2017	
参考書・資料等 (Supplementary Reading)		講義中に参考文献を紹介する	
備考 (Other Information)			
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)		電子メールによる。 kamitani-tatsuo@fukuchiyama.ac.jp	

科目名称			担当教員	
経営戦略論			平野 真	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無
授業の概要 (Course Description)				
経営戦略論は、企業間の競争が激化した戦後の国際化時代を背景に米国を中心に発展してきました。この授業では、戦略論の歴史や主な戦略論の考え方を学習し、基本的な考え方を理解した上で、実際の戦略づくりの練習を行います。また、戦略論を更に分野別に、財務戦略論、技術戦略論、マーケティング戦略論、ビジネスモデル戦略論、組織戦略論、事業戦略論の各論について解説し、現代企業の戦略論の立て方についての基本知識を学びます。なお授業の進め方は、学生の理解度に応じて多少の変更を行うことがあります。				
授業の到達目標 (Course Objectives)				
1)SWOT分析の考え方を理解し、実際にSWOT分析を活用して戦略を練ることができるようになる。 2)現代企業の様々な戦略の立て方を理解し、自分の考えを述べられる。				
授業計画 (Course Schedule)				
第 1 回	オリエンテーション、第一部経営戦略の基礎 (1) 経営戦略とは？戦略論の歴史			
第 2 回	第一部経営戦略の基礎 (2) ポジショニング・ビュー 1			
第 3 回	第一部経営戦略の基礎 (3) ポジショニング・ビュー 2			
第 4 回	第一部経営戦略の基礎 (4) リソース・ベースド・ビュー 1			
第 5 回	第一部経営戦略の基礎 (5) リソース・ベースド・ビュー 2			
第 6 回	第一部経営戦略の基礎 (6) SWOT分析 1			
第 7 回	第一部経営戦略の基礎 (7) SWOT分析 2			
第 8 回	第一部のまとめ、発表会			
第 9 回	第二部戦略論各論 (1) 財務戦略論			
第 10 回	第二部戦略論各論 (2) 技術戦略論			
第 11 回	第二部戦略論各論 (3) マーケティング戦略論			
第 12 回	第二部戦略論各論 (4) ビジネスモデル戦略論			
第 13 回	第二部戦略論各論 (5) 組織戦略論			
第 14 回	第二部戦略論各論 (6) 事業戦略論			
第 15 回	総復習とまとめ			
授業時間外学習 (Supplementary Activities)				
授業で特に重要なのは復習である。授業で学習した内容がよく理解できない場合や授業中に埋めるべきレジュメの空欄が埋められなかった場合は、必ず次回に質問して理解を深めるようにする。また頻繁に宿題があるので、これを欠かさず行い提出することが大切である。理論の理解を確認する中間発表会があるので、この準備をすることを通じ、忘れないうちに学習した知識を整理すること。				

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
宿題や授業中の発言など (20%) 中間発表会 (30%) 最終テスト(50%)	秀：適切に問題点を指摘し、特筆すべき鋭い分析や考察ができ、現実的な解決策を提示できる 優：授業で学習したことを良く理解でき指摘した問題点に対し適切な解決策を提示できる 良：授業で学習した内容を基本的には理解でき、指摘した問題点に対し解決策を提示できる 可：授業内容の理解、問題点の指摘と解決策の提示が、最低限の水準を満たしている 不可：授業の内容が理解できておらず、問題点や解決策の提示ができない、あるいは3分の1を超えて欠席した
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 授業で配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	経営能力開発センター編「経営学検定試験公式テキスト1」中央経済社（就職対策として、資格の取得に興味のある人に役立つ。） 基本的には、講義のレジュメの中で、参考文献を紹介する。
備考 (Other Information)	3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メール連絡 hirano-makoto@fukuchiyama.ac.jp

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
グローバルビジネス(国際経営論)				平野 真	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
現代においては、企業も人も、グローバル化と無関係に生きていくことはもはやできません。国際環境の変化の中で、どのように企業を経営していくか、また人や社会も、どのように考え行動していくか、絶えず考え続けていかねばならないのです。授業では、前半、国際的な取引や企業経営の現実的な問題をビデオなどを見ながら具体的に事例に沿って考えていき、同時に必要な知識をまとめていきます。後半では、グローバル化した産業の問題点を中心に、企業のみならず地域社会の人々がグローバル化とどのように向き合い考えていく必要があるのか、世界全体が持続可能な発展を続けるにはどうしたらいいのかなどを考えていきます。なお授業の進め方や評価手法については、多少の変更を行うことがあります。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
1)国際化に関係して企業が考えなければならない主要課題について説明し、具体的な対策を挙げることができる。2)国による企業経営の在り方の違いを例をあげて説明でき、グローバル社会の中で企業経営や海外活動をどのように考えていけばいいか、自分の考えを述べられる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション (授業の概要、評価の説明、グローバル化とは?)				
第 2 回	第一部国際経営学の基礎(1)企業活動の国際化:イタリア、フェラガモ社の事例				
第 3 回	第一部国際経営学の基礎(2)多国籍企業:レナウンの中国企業による買収事例				
第 4 回	第一部国際経営学の基礎(3)グローバル化とローカル化:台湾の半導体企業の事例				
第 5 回	第一部国際経営学の基礎(4)異文化問題:インドネシアの金融事業の事例				
第 6 回	第一部国際経営学の基礎(5)海外生産と産業空洞化:タイの金型事業の事例				
第 7 回	第一部国際経営学の基礎(6)国際マーケティング:海外で活躍する日本の若者の事例				
第 8 回	第一部の復習とまとめ				
第 9 回	中間テストによる学習の検証				
第 10 回	第二部グローバル化の課題(1) グローバル社会の課題:「不都合な真実」の紹介				
第 11 回	第二部グローバル化の課題(2) 持続可能な発展への戦略:デンマークでの取材ほか				
第 12 回	第二部グローバル化の課題(3) これからの世界と中国:中国での取材ほか				
第 13 回	研究発表会				
第 14 回	研究発表会				
第 15 回	総復習とまとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業で特に重要なのは復習である。授業で学習した内容がよく理解できない場合や授業中に埋めるべきレジュメの空欄が埋められなかった場合は、必ず次回に質問して理解を深めるようにする。6回分の授業が終わるごとに整理しなければならない事項のテストがあり、この準備をすることを通じ、知識を頭の中に整理する。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
小テスト(20%) 中間テスト(20%) 研究レポート(20%) 最終テスト(40%)	秀:適切に問題点を指摘し、特筆すべき鋭い分析や考察ができ、現実的な解決策を提示できる 優:授業で学習したことを良く理解でき指摘した問題点に対し適切な解決策を提示できる 良:授業で学習した内容を基本的には理解でき、指摘した問題点に対し解決策を提示できる 可:授業内容の理解、問題点の指摘と解決策の提示が、最低限の水準を満たしている 不可:授業の内容が理解できておらず、問題点や解決策の提示ができない、あるいは3分の1を超えて欠席した
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 授業で配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	「現代グローバル経営要論」山下達哉、高井透著、同友館。ほかに講義のレジュメの中で、参考文献を紹介する。
備考 (Other Information)	3分の1以上(6回以上)の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メール連絡 hirano-makoto@fukuchiyama.ac.jp

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
簿記論Ⅱ				井上 直樹	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要 (Course Description)					
簿記は、企業等が行う様々な取引活動を効率的かつ体系的に記録し、ある時点での財政状態や一定期間の経営成績を明らかにするために必要とされるものである。 本講義では、複式簿記についての基礎的な知識や技術を修得し、取引の仕訳から勘定記入、決算手続きまでの一連の流れを学んでいく。 本講義では、小規模株式会社を主な対象としているが、複式簿記にもとづく発生主義会計の考え方を理解することで、営利・非営利を問わず、各主体における会計上の問題や課題の発見につなげることを目的とする。また、問題や課題解決のために、適切かつ確かな会計情報の収集・分析に必要とされる基礎的技術の学修を目指す。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
小規模株式会社を前提として、簿記論の前提となる貸借原理・帳簿組織の基礎知識を修得し、簿記一巡の流れを理解することができる。また、基本的な商業簿記を理解し、経理関係書類の適切な処理など、初歩的な実務がある程度できるための知識を修得する。 簿記の技術は自分の手を動かしてようやく身に付くものであるため、特に、日商簿記検定試験を受験する学生は、講義外において、できるだけ多くの問題を解く必要がある。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンスと簿記論Ⅰの復習				
第 2 回	仕訳と転記				
第 3 回	現金と預金				
第 4 回	繰越商品・仕入・売上				
第 5 回	売掛金と買掛金/その他債権と債務 (1)				
第 6 回	その他債権と債務 (2)				
第 7 回	受取手形と支払手形				
第 8 回	有価証券/固定資産 (1)				
第 9 回	固定資産 (2)				
第 10 回	貸倒損失と貸倒引当金				
第 11 回	資本金と引出金/収益と費用 (1)				
第 12 回	収益と費用 (2) /伝票				
第 13 回	決算手続と財務諸表の作成				
第 14 回	総合問題演習と解説				
第 15 回	これまでの内容のまとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業ごとに前回授業内容に関する小テストを実施するため、毎回1時間程度の復習をしておくこと。 次回講義の予習として、テキストの該当箇所を1時間程度事前に読んでおくこと。 実際に仕訳をノートに書き、電卓を使って問題を解くことが、簿記の理解と上達につながる。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (80%) 講義中の小テスト (10%) 授業態度 (10%)	秀: 100点 - 90点 優: 89点 - 80点 良: 79点 - 70点 可: 69点 - 60点 不可: 59点 - 0点
テキスト (Textbook)	【書名】 検定簿記講義／3級商業簿記 【著者】 渡部裕亘ほか 〔平成30年度版〕 【出版社】 中央経済社 【出版年】 2018
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	必要に応じて、講義で配布するレジュメで指示する。
備 考 (Other Information)	・講義には、テキスト、電卓 (12桁以上、大きさ: 10cm×15cm以上のものが望ましい) および練習問題の解答用紙様式を携行すること。 ・私語厳禁を徹底する。 ・授業の進捗等を判断し、授業計画を変更する場合がある。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メールによる予約。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
グリーンツーリズム論				中尾 誠二	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
日本における「グリーンツーリズム政策」について、その理念や背景について詳しく考察する。さらに、農林漁家民宿・農林水産物直売所・農山漁村レストラン・道の駅といった「グリーンツーリズム施設」や日本型ワーキングホリデー等「ソフト事業」の現状と課題を明らかにし、2003年以降に全国適用された旅館業法等の規制緩和によってもたらされた「農山漁村民泊」の新たな動き等を踏まえ、今後の展望を行う。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
「地域経営」の視点から、グリーンツーリズムによる農山漁村振興の概要・各論を学び、政策的問題解決の基本的な考え方を身につける。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	グリーンツーリズム・グリーンライフ・エコツーリズム (1)				
第 2 回	グリーンツーリズム・グリーンライフ・エコツーリズム (2)				
第 3 回	農林漁業・農山漁村の魅力と多面的機能 (1)				
第 4 回	農林漁業・農山漁村の魅力と多面的機能 (2)				
第 5 回	農林漁家民宿・農山漁村レストラン (1)				
第 6 回	農林漁家民宿・農山漁村レストラン (2)				
第 7 回	クラインガルテン・市民農園 (1)				
第 8 回	クラインガルテン・市民農園 (2)				
第 9 回	観光農園・農林水産物直売所 (1)				
第 10 回	観光農園・農林水産物直売所 (2)				
第 11 回	公的交流施設 (道の駅・農林漁業体験実習館・廃校活用施設) と指定管理者制度				
第 12 回	旅館業法等の規制緩和と農山漁村民泊 (1)				
第 13 回	旅館業法等の規制緩和と農山漁村民泊 (2)				
第 14 回	農山漁村ワーキングホリデーとWWOOF				
第 15 回	オーライ! ニッポン運動と教育旅行受入による農山漁村地域の活性化				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
① 授業前にテキストの該当部分を予め読んでおくこと					
② ニュースや新聞に絶えず目を向けておくこと					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (40%)	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している 良：おおよその説明はできており、かつ、問題点を理解している 可：しくみや問題点の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：しくみや問題点が説明できていない
講義ノート記載状況 (40%)	
受講態度 (20%)	
テキスト (Textbook)	【書名】 グリーンライフ入門 【著者】 佐藤誠・篠原徹・山崎光博 (編著) 【出版社】 農山漁村文化協会 【出版年】 2005年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	適宜紹介
備考 (Other Information)	・ 指定時期までにテキストを入手しない場合は受講を認めない。また、講義後は毎回ノートを提出してもらうため、バインダー (ルーズリーフ) 方式のノートを用意すること。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	研究室 (4 号館 4 F 南側一番奥) 前に掲示したTel/Mail等へ連絡もしくは入室時に直接面談

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
経営組織論				篠原 正人	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
企業あるいは行政組織には、必ず組織の組成とその効率的な運営が必要である。従って、経営を行うことは、組織をどのように活用するかの問題である。 この授業では、組織論の基礎的理論を教科書に則って順次学習する。経営組織の構成員は人間であるから、組織が独り歩きしないよう、人間を効果的に活用する方法が同時に必要となる。 また、今後さらに進展するであろう企業の国際化、経営のグローバル化に即応した組織のあり方についても考察する。 授業は原則として教科書に沿って進め、履修者が自らその内容を予習し、授業中に自らそれを解説するという能動的な態勢を取る。さらに、履修者が自分で調べてきたテーマを、発表する機会を多く設ける。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
1) 企業や行政組織がどのような考え方に基いて運営されているのかを理解している。 2) 組織論の基礎が理解できている。 3) 組織の成長を促すために、どのような革新が必要かを理解している。 4) 西洋的経営組織と日本的経営組織の比較ができる。 5) 論理的な発表ができる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	組織論を学ぶ意義 (オリエンテーション)				
第 2 回	組織の定義と組織論の枠組み				
第 3 回	組織と官僚制				
第 4 回	組織のボトルネック				
第 5 回	組織デザインの有効性				
第 6 回	組織と個人の欲求				
第 7 回	フリーライダー				
第 8 回	自主研究：ケーススタディ (1)				
第 9 回	組織と決断				
第 10 回	組織と権力				
第 11 回	欧州の企業組織と企業文化				
第 12 回	組織の腐り方				
第 13 回	異文化経営における組織運営				
第 14 回	自主研究：ケーススタディ				
第 15 回	全体の総括				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
経営の実践を学ぶ機会を見つけ、理論と照らし合わせてみる。 特に、実践的教育を通じて地域連携の中で企業や官庁の組織の実態を観察し考察する。 新聞や雑誌を常に読んで、組織問題がどのように取り扱われているかを自習する。 人前で発表できるよう練習をする。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業への貢献度 (50%) 課題 (50%) を基本とする。 10回以上出席を単位付与の条件とする。	秀：学んだ専門用語を駆使して、論理的・客観的な説明ができ、かつ、問題点の解決方法を指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的・客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している 良：おおよその説明はできており、問題点を理解している 可：経営組織論とは何かを説明することについて、最低限の水準を満たしている 不可：経営組織論学習の意欲がなく、内容を説明できない
テキスト (Textbook)	【書名】 「組織戦略の考え方」 【著者】 沼上 幹 【出版社】 ちくま新書 【出版年】 2003年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	日本経済新聞 週刊ダイヤモンド 「組織論」 桑田耕太郎他著、有斐閣アルマ その他、講義の中で適宜参考文献を紹介する
備考 (Other Information)	大学教育は「教えてもらう」ものではなく、学生が自分で学習するのを教員が「アシスト」するのだという原則を貫く。 課題レポートを提出しなかった者は単位付与付加とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	shinohara-masato@fukuchiyama.ac.jp

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
交流観光政策論(観光経済論)				中尾 誠二	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
定住人口の増加が難しくなった多くの地域において、交流人口の増加を目指した取組が進められています。また、国からも観光立国推進基本法等に基づく各種の政策が打ち出され、大都市圏・地方圏を問わず様々な地域活性化策が講じられています。 本科目では、交流や観光を切り口とした地域振興策について幅広い視点を持ちつつも、一般的な観光では見過ごされてきた地域資源(人や文化など)を活かした「交流型観光」に関する政策体系を重点領域とします。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
1) 交流や観光に関する法体系や政策群について理解できるようになる。 2) 交流型観光に関する地域資源を見出すことができるようになる。 3) 地域資源を活かした交流型観光プランを策定することができるようになる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	交流観光政策とは？				
第 2 回	観光立国推進基本法				
第 3 回	旅行業法				
第 4 回	旅館業法				
第 5 回	農山漁村余暇法				
第 6 回	都市と農山漁村の共生・対流				
第 7 回	子ども農山漁村交流プロジェクト				
第 8 回	食品衛生法、建築基準法、都市計画法、道路運送法				
第 9 回	シェアリングエコノミー問題				
第 10 回	インバウンド観光と通訳案内士				
第 11 回	エコツーリズム推進法・リゾート法				
第 12 回	地域資源と外部経済				
第 13 回	中小企業地域資源活用促進法				
第 14 回	六次産業化・地産地消法				
第 15 回	まとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
ニュースや新聞に絶えず目をつけておくこと					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (40%) 講義ノート記載状況 (40%) 受講態度 (20%)	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している 良：おおよその説明はできており、かつ、問題点を理解している 可：しくみや問題点の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：しくみや問題点が説明できていない
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	適宜紹介します
備 考 (Other Information)	講義後は毎回ノートを提出してもらうため、バインダー（ルーズリーフ）方式のノートを用意すること。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	研究室（4号館4F南側一番奥）前に掲示したTel/Mail等へ連絡もしくは在室時に直接面談

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
原価計算論				井上 直樹	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要(Course Description)					
原価計算の目的と仕組みを学修し、組織の経営実務で必要となる管理会計の基礎を学ぶ。原価計算の全体像を概観したのち、目的に応じて、個別分野ごとに具体的な原価計算の計算手法や特徴などを確認する。 本講義では、製造業における原価計算を主な対象としているが、営利・非営利、業種などを問わず、各主体における原価計算上の問題や課題の発見につなげることを目的とする。また、問題や課題解決のために、製造原価情報を適切かつ的確に収集・分析することを目指す。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
原価計算の基本用語や原価と利益の関係を分析・理解し、原価手法とその利用方法を修得する。その結果、製品やサービスの原価を正確に把握し、組織の生産性向上を目的とした施策を実施できる。原価計算の理解や分析は、自分の手を動かしてようやく身に付くものであるため、特に、日商簿記検定試験を受験する学生は、講義外において、できるだけ多くの問題を解く必要がある。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンスと原価計算の全体像				
第 2 回	原価の概念と計算				
第 3 回	原価の分類と損益計算				
第 4 回	CVP分析 (1)				
第 5 回	CVP分析 (2)				
第 6 回	原価予測の方法				
第 7 回	予算実績差異分析				
第 8 回	標準原価計算 (1)				
第 9 回	標準原価計算 (2)				
第 10 回	原価の集計				
第 11 回	在庫の原価				
第 12 回	製品別・サービス別の損益計算書				
第 13 回	総合問題演習と解説 (1)				
第 14 回	総合問題演習と解説 (2)				
第 15 回	これまでの内容のまとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
授業ごとに前回授業内容に関する小テストを実施するため、毎回1時間程度の復習をしておくこと。 次回講義の予習として、テキストの該当箇所を1時間程度事前に読んでおくこと。 実際に電卓を使って問題を解くことが、原価計算の理解と上達につながる。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験(80%) 講義中の小テスト(10%) 授業態度(10%)	秀: 100点 - 90点 優: 89点 - 80点 良: 79点 - 70点 可: 69点 - 60点 不可: 59点 - 0点
テキスト (Textbook)	【書名】 土日で合格る原価計算初級 【著者】 資格の大原 【出版社】 中央経済社 【出版年】 2018
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	岡本清ほか『検定簿記講義/2級工業簿記〔平成30年度版〕』中央経済社、2018年。
備考 (Other Information)	・講義には、テキストおよび電卓(12桁以上、大きさ: 10cm×15cm以上のものが望ましい)を携行すること。 ・私語厳禁を徹底する。 ・授業の進捗等を判断し、授業計画を変更する場合がある。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メールによる予約。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
地域協働論				杉岡 秀紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要(Course Description)					
地域を構成する主体は「産学公民金労言」と言われるように、実に多様であり、それぞれが地域と深く関わっている。一方、近年地域、とりわけ地域公共を取り巻く環境は、「新しい公共」と呼ばれるように、ますます地域課題が多様化・高度化・複雑化・専門化・不確実化する中で、もはや単独の主体だけでは課題解決できない時代に突入している。 そこで、本講義では、まず地域を構成するアクターやセクターごとにキーとなる概念について学んでいく。また、北近畿地域内外を問わず、第一線のゲストスピーカーの招聘による事例研究を通じ、現場の声にも触れていく。 なお、講師は、公共政策大学院修了後、行政、民間企業、NPO、大学など多様な職場で働いてきた経験を持つ。そういった意味から机上の空論ではなく、現場から抽出されたエッセンス、実際の社会で使えるスキルというものに照射して、講義を進める。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
以下の知識・スキルを体得することを到達目標とする。 ・グローバル化する世界と地域社会の関係を理解できる。 ・対象となる課題群の相互関係を把握し分析することができる。 ・地域社会における様々な活動と、活動をこなす主体との関係の実践的把握ができる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	地域とは何か				
第 2 回	地域協働とコミュニティ				
第 3 回	地域協働と法政策				
第 4 回	地域協働と地域創生				
第 5 回	地域協働と新しい公共				
第 6 回	地域協働とボランティア、サービス・ラーニング				
第 7 回	地域協働とNPO、サードセクター				
第 8 回	地域協働とコミュニティビジネス、ソーシャルビジネス				
第 9 回	地域協働人材育成（地域公共人材）				
第 10 回	地域協働とソーシャルデザイン				
第 11 回	地域協働とフューチャーセンター、フューチャーデザイン				
第 12 回	地域協働の事例研究①：大学				
第 13 回	地域協働の事例研究②：企業				
第 14 回	地域協働の事例研究③：NPO				
第 15 回	地域協働の事例研究④：行政				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
・予習としては、参考図書を読んでおくことが望ましい。 ・復習としては、毎回配布するレジュメをしっかりと読みなおし、理解を深めること。 ・またペアワークやグループワークはトピックなテーマを取り上げるため、ニュースや地元新聞に絶えずチェックしておくこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
出席点 (15%) 小レポート (15%) 授業態度・講義への貢献 (10%) 期末レポート (60%)	秀：講義で習った概念を自分の言葉で論理的かつ客観的に説明でき、かつ課題点も指摘することができる。また、自学自習や実践につなげている。 優：講義で習った概念を自分の言葉で論理的かつ客観的に説明でき、かつ課題点も指摘することができる。 良：講義で習った概念を理解でき、他者に一部説明することができる。 可：講義で習った概念を最低限理解している。 不可：講義で習った概念を理解できていない。
テキスト (Textbook)	特になし。講義内に配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	真山達志・今川晃・井口貢『地域力再生と政策学』（ミネルヴァ書房、2010）、野村恭彦『フューチャーセンターをつくろう』（プレジデント社、2012）、今川晃編『地域公共人材をつくる』（法律文化社、2013）、青山公三・小沢修司・杉岡秀紀・藤沢実『もうひとつの「自治体行革」』（京都政策研究センターブックレット vol. 2)』（公人の友社、2014）、白石克孝・石田徹編『持続可能な地域実現と大学の役割』 地域公共人材叢書第3期第1巻（日本評論社、2014）、今川晃編『地方自治を問いなおす』（法律文化社、2014）、杉岡秀紀編著『地域力再生とプロボノ』（京都政策研究センターブックレット vol. 3)』（公人の友社、2015）、西條辰義『フューチャーデザイン』（勁草書房、2015）、青山公三・小沢修司・杉岡秀紀ほか『地域創生の最前線』（京都政策研究センターブックレット vol. 4)』（公人の友社、2016）、青山公三・小沢修司・杉岡秀紀ほか『「みんな」でつくる地域の未来』（京都政策研究センターブックレット vol. 5)』（公人の友社、2017）、杉岡秀紀ほか編『合併しなかった自治体の実際』（公人の友社、2018）、牛山久仁彦ほか編『日本の自治と地域行政（仮）』（共著/華書房/2018年予定）
備考 (Other Information)	・本講義は、毎回ペアワークやグループワーク実施し、学びの双方向性を重視する（アクティブ・ラーニング）。完全な座学ではないため留意すること。 ・3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	Eメール (sugioka-hidenori@fukuchiyama.ac.jp) に連絡すること。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
文学				井口 和起	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要 (Course Description)					
「君死にたまふこと勿れ」(詩)の作者、与謝野晶子の文学作品を素材に作家の生きざまと文学について考えていきます。彼女は人名辞典などでは、歌人、作家、思想家などと解説されたとおり、まず女流歌人として登場しますが、詩や童話や小説、それに数多くの評論を書いています。ですから文学のさまざまなジャンルに接することができます。また、彼女は明治・大正・昭和(戦前期)を生き抜き、戦争について、女性の生き方について、教育についてなど、時代の大きな課題に立ち向かっています。授業では、彼女の作品(歌、詩、評論、旅行記など)を時代の変化をたどりながら読み進め、彼女が「時代」をどのようにとらえ、真摯に生き抜こうとしたか、その生きざまを作品をとおして考察し、彼女にとって、文学の営みはどんな意味を持っていたのかを考えてみたいと思います。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
多様なジャンルの文学作品を理解でき、鑑賞する能力を高める。そのうえで、各作品の意味を時代の中に位置づけて理解でき、最終的には文学作品をその作家の生きざまの中でとらえ、視野を広げて他の作家の作品についても関心を向け、文学に親しみ、深く理解する能力を高めることを目指します。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス：与謝野晶子の生涯と作品から多様な文学のジャンルを考えます。				
第 2 回	最初の歌集『みだれ髪』—浪漫派女流歌人の登場—				
第 3 回	日露戦争と「君死にたまふこと勿れ」(詩)				
第 4 回	「ひらきぶみ」—「歌」にかけた魂—				
第 5 回	『青鞥』と「そぞろごと」(詩)—山の動く日来る—				
第 6 回	「戦争」(詩)—第一次世界大戦と晶子—				
第 7 回	「豚獣の群れ」(詩)—晶子の国家観—				
第 8 回	「何故の出兵か」(評論)—米騒動とシベリア出兵—				
第 9 回	「平塚・山川・山田三女史に答ふ」(評論)—「母性保護論争」の意味—				
第 10 回	「文化学院の創立に就て」—晶子の教育観—				
第 11 回	「…我等は陛下の赤子…」(詩：無題)—晶子の天皇観—				
第 12 回	鉄幹との共著『満蒙遊記』—1920年代後半の中国観—				
第 13 回	「紅顔の死」(詩)—「第一次上海事変」に際して—				
第 14 回	「…わが四郎み軍に往く猛く戦へ」(歌)—太平洋戦争の勃発と病床の晶子—				
第 15 回	まとめ—「自我」と時代と文学と—				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
・授業で毎回指定する予習課題を学習しておくこと。 ・「青空文庫」で読むことが可能な作品も多いので、指定したものを事前に読んでおくことが望ましい。 ・授業では毎回出席カードに授業に関する疑問・感想などを書いて提出してもらいます。 ・作品の音読してもらいます。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業中の音読への参加 (20%) 毎回提出カード記載内容 (20%) 最終レポート (60%)	秀：晶子の適切な作品を読み解き、時代の中に位置づけ、彼女の生きざまと関連させて優れた論評を行なえる。 優：晶子の代表作を取り上げて、彼女の文学的な営みの意義を説明できる。 良：晶子の代表作を取り上げて優れた感想文を書ける。 可：授業で取りあげた作品を読み、感想を文章表現できる。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 特になし。授業時に資料配布。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	入江春行『与謝野晶子とその時代』(新日本出版社、2003年) 赤塚行雄『決定版 与謝野晶子研究』(学芸書林、1994年) 香内信子『与謝野晶子-昭和期を中心に-』(ドメス出版、1993年)
備考 (Other Information)	
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	一覧表参照。

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
地域産業論				佐藤 充	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要 (Course Description)					
地域産業は地域の経済活動を支える基盤であり、地域経済の成長を生み出す原動力となる。それぞれの地域では、資源の賦存量や事業所の集積状況などによって特徴づけられる産業構造が形成され、域内ないし域外の市場に向けた財・サービスが生産されている。また、地域産業には、国内外での経済活動の影響を受けながらも、地域の特性に基づくイノベーションや新事業の創出が期待されている。 本講義は、地域産業の概念や仕組みを学習するとともに、地域産業の実態と課題について、具体的なデータや事例を通して理解することを目的とする。あわせて、地域経済における地域産業の役割や問題点を議論・検討するものである。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
① 地域経済における産業の役割を理解し、地域産業を取り巻く国内外の経済環境や地域産業の構造について説明することができるようになる。 ② 地域産業が直面している諸問題を把握し、具体的な根拠に基づき、今後の在り方に関する展望や構想を提示することができるようになる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	イントロダクション グローバル化と地域経済・産業				
第 2 回	日本の地域構造				
第 3 回	地域経済の仕組み				
第 4 回	地域経済の成長				
第 5 回	地域間の交易				
第 6 回	産業の立地				
第 7 回	産業集積の構造①				
第 8 回	産業集積の構造②				
第 9 回	産業集積の構造③				
第 10 回	知識経済と地域イノベーションの創出				
第 11 回	地域産業と起業・スタートアップ企業				
第 12 回	内発的発展と地域内産業連関				
第 13 回	地域における創造産業				
第 14 回	地域産業政策の展開				
第 15 回	全体のまとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
① 各講義の最後に、次回までの小課題を指示する。 ② 講義後は、配布資料とノートを読んで復習すること。 ③ ニュースや新聞記事等に目を通し、地域産業に関する時事問題について、自らの意見を考えること。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (60%) 小課題 (30%) 講義での発言 (10%)	秀：概念やフレームワークを適切に用いて、事象の問題点を、論理的かつ客観的に説明でき、すぐれた解決策を提示できる。 優：概念やフレームワークを適切に用いて、事象の問題点を、論理的かつ客観的に説明でき、解決策を提示できる。 良：概念やフレームワークを用いて、事象の問題点についておおよその説明ができ、一応の解決策を提示できる。 可：概念やフレームワークを理解し、事象の問題点について最低限の説明ができる。 不可：概念やフレームワークを用いて、事象の問題点を説明できていない。
テキスト (Textbook)	【書名】 なし 【出版社】 【著者】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	各講義のなかで、適宜、参考文献を提示する。
備 考 (Other Information)	講義に3分の2以上出席しなければ定期試験は受験できません。 講義中は、できるだけ、積極的な発言を求めます。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	配布するレジюмеに記載された連絡先に連絡すること。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
自治体政策法務(自治体法務政策)				福島 貞道	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
政策法務という言葉が生まれて既に久しいが、その捉え方や理論については識者等によって様々な考え方や議論がある。 この講義では、法治国家である我が国の基本的な統治制度を理解する中で、国として或いは自治体として、それぞれの立場で果たすべき住民の福祉の増進のための政策と、それを実現させるための手法としての法務の関係性を学ぶ。 自治体経営においては、課題解決のためだけではなく、先駆的にその都市の将来を見据えた政策の企画、立案も重要であり、そのような観点から、政策及びその具現化のための条例の制定、その主旨の正しい解釈・運用の下での執行等に係る法務の実態を、実例も参考にしながら学ぶことによって、政策法務の意義及びその在り方について論じることができる基礎的知識と自治体政策法務の実践的能力の基本の習得を目指す。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
政策法務の概要を理解し、国の法制度等との関わりの中で自治体政策法務に係る意義及びその在り方について論じることができる基礎的知識と、条例制定のための基礎的能力を習得する。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス (実践の視点からの学び)				
第 2 回	基本認識 (1) 法治国家				
第 3 回	基本認識 (2) 法治制度と法治主義				
第 4 回	政策法務とは (1)				
第 5 回	政策法務とは (2)				
第 6 回	政策法務とは (3)				
第 7 回	日本の政治の仕組 (1)				
第 8 回	日本の政治の仕組 (2)				
第 9 回	自治体政策法務の重要性				
第 10 回	自治体の政策法務 (条例制定) の権限と限界				
第 11 回	実例に基づく政策法務の実態 (1)				
第 12 回	実例に基づく政策法務の実態 (2)				
第 13 回	条例制定の在り方				
第 14 回	自治体政策法務の要諦				
第 15 回	まとめ				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
・ 講義で学んだことを、継続的にかつ反復的に復習すること。 ・ 政策は、直接、間接に私達の暮らしに関係することです。日常的に新聞等により、社会の動向を把握するようにすること。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
平常点 (15%) レポート (15%) 定期試験 (70%) なお、平常点については、真摯で積極的な授業参加の姿勢への評価であり、毎授業時に提出する「感想文(質問含む)」も参考にする。	秀：我が国の統治制度と政策法務の概要を理解し、的確な問題点の指摘と総合的な観点に基づいた政策の立案及びその具現化のための条例の制定について論じることができる。 優：我が国の統治制度と政策法務の概要を理解し、課題解決のための政策と条例について論じることができる。 良：我が国の統治制度と政策法務の概要が凡そ理解できている。 可：我が国の統治制度と政策法務の最低限の理解ができている。 不可：我が国の統治制度と政策法務に関する理解が一定の水準を満たしていない。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 ・特になし。授業に際しレジュメを配布する。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	・適宜紹介する。
備考 (Other Information)	・6回以上の欠席者は定期試験の受験は認めない。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	・メール等でアポイント

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
コミュニティビジネス				塩見 直紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
この授業は、国内外におけるコミュニティビジネス（社会起業も含）の現状と動向、手法、戦略等を先進例、若手ベンチャー、新しい潮流に学んでいく。地域資源活用、新しい組み合わせ、コンセプトメイク、ブランディング、情報発信等なども重要なキーワードとして、一般の企業経営においても応用可能な内容とし、考え方や方法の理解が深まるように事例紹介も含め講述する。最終日には、自らがコミュニティビジネスをおこなう学生ベンチャーとして、福知山と地元（出身地）での2案、企画し、各自プレゼンする。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
・ コミュニティビジネスの現状と課題について基本的な知識を修得する。 ・ コミュニティビジネスの経営センス、経営の在り方、戦略等を学ぶ。 ・ 地域資源（地域資源創出）を活かしたコミュニティビジネスの独自戦略プランを立案できる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	コミュニティビジネス論の概要とめざす方向性について（オリエンテーション）				
第 2 回	コミュニティビジネスとは何か、社会起業（ソーシャルビジネス）とは何か				
第 3 回	コミュニティビジネス事例研究（テーマ：都市）				
第 4 回	コミュニティビジネス事例研究（テーマ：農村）				
第 5 回	コミュニティビジネス事例研究（テーマ：子育て）				
第 6 回	コミュニティビジネス事例研究（テーマ：食）				
第 7 回	コミュニティビジネス事例研究（テーマ：農）				
第 8 回	コミュニティビジネス企画ワークショップ（個別プレゼンテーション準備）				
第 9 回	コミュニティビジネス事例研究（テーマ：貧困）				
第 10 回	コミュニティビジネス事例研究（テーマ：高齢者）				
第 11 回	コミュニティビジネス事例研究（テーマ：こころ、絆）				
第 12 回	コミュニティビジネス事例研究（テーマ：教育）				
第 13 回	コミュニティビジネス事例研究（テーマ：空き家）				
第 14 回	コミュニティビジネス事例研究（テーマ：未来）				
第 15 回	個別プレゼンテーション（学生コミュニティビジネスベンチャー構想）				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
・ コミュニティビジネス（社会起業）について、日ごろから問題意識をもつこと。 ・ コミュニティビジネスを自分も立ち上げるとする気概をもち、関連書を手にするなど、自己学習をおこなうこと。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (60%) 毎回の感想・気づき・提案シート (20%) 個別最終プレゼン (20%)	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、課題や独自の解決策を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、課題を理解し、解決策を提示できる 良：おおよその説明はできており、かつ、課題を理解している 可：課題の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：課題が説明できていない
テキスト (Textbook)	【書名】 毎講義のレジュメの中で、適宜、参考文献を紹介する 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	毎講義のレジュメの中で、適宜、参考文献を紹介する
備 考 (Other Information)	3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする。※1回目の授業も5回の欠席を含むので注意
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メール (conceptforx@gmail.com) にて連絡すること。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
地域農業システム論 (地域農業ビジネス論/農業ビジネス論)				矢口 芳生	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
貿易の自由化等経済のグローバル化の進展のなかで、日本農業はビジネス型の大規模農業の展開がみられるものの様々な問題も抱えている。農業担い手は減少・高齢化し、多くは兼業農家や自給的農家となり、耕作放棄地が増大している。とくに中山間地域ではこうした状況が深刻で鳥獣被害も多く、集落は消滅しつつある。地域農業がビジネスとして展開し、諸問題を改善・解決し、そのための対策を早急に確立して地域農業をシステム化する必要がある。 講義では、農業とはどのような産業なのか、日本農業の現状と関連する制度・政策、食の安全、作目別の生産状況、持続可能な農業・地域農業のあり方、世界の食料と農業の状況や課題と展望、等について講じる。さらに農業の特質と役割、地域農業ビジネスの展開方向、地域農業のシステム化について考える。なお、「感想シート」により、授業の理解度と参加態度をみながら講義を進める。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
世界・日本・地域の食料や農業の状況を理解し、農業の特質を踏まえて、地域農業の方向性を考えられるように、次の2点を到達目標にする（基礎知識の獲得と応用）。 1. 日本と世界の農業・食料の状況を理解し、農業・食料に関する用語を用いて説明や文書作成ができるようにする。 2. 工業（製造業）と農業の共通性と相違（農業の特質）を理解し、地域農業のニーズを把握し、説明・討議できるようにする。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	オリエンテーション 農業・農村とは何か（1）				
第 2 回	農業・農村とは何か（2）				
第 3 回	農業生産の構成要素の現状（1）				
第 4 回	農業生産の構成要素の現状（2）				
第 5 回	稲作農業・園芸農業・畜産業				
第 6 回	日本農政の戦後史				
第 7 回	世界の食料事情と食料・農業貿易（1）				
第 8 回	世界の食料事情と食料・農業貿易（2）				
第 9 回	地域農業のビジネス化・システム化（1）				
第 10 回	地域農業のビジネス化・システム化（2）				
第 11 回	地域農業の活性化・システム化（1）				
第 12 回	地域農業の活性化・システム化（2）				
第 13 回	地域農業の活性化・システム化（3）				
第 14 回	地域農業の活性化・システム化（4）				
第 15 回	まとめー現代社会における〈農〉の意義と役割				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
1. 指定したテキストは必ず読んでおくこと。また、参考書にも挑戦しよう。 2. わからない点等は授業毎の「感想シート」に記入すること。 3. 自分の住んでいる地域の農家の人々と話す機会をつくろう。 4. 農家の悩み、課題や問題の解決方向について農家とともに考えてみよう。					

評価方法 (割合)	評価基準
感想シート (15 %) 期末試験 (85 %)	「感想シート」で毎回1点で評価。 期末テストは理解の到達度を85点満点で評価。 評価に際して授業態度も考慮する。 期末テストの評価基準は次のとおり。 秀：設問に適切に答えている。 優：設問に答えている。 良：設問に答えていない箇所がある。 可：設問に答えていない箇所が多いが、最低限の水準を満たす。 不可：設問に答えていない。講義への欠席は5回まで。
テキスト (Textbook)	【書名】 『世界と日本の食料・農業・農村に関するファクトブック2018』税別600円 【著者】 JA全中 【出版社】 (株)日本農業新聞 【出版年】 2018年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	矢口芳生『農家の将来ーTPPと農業・農政の論点』農林統計出版、2013年。適宜、資料を配布する。
備 考 (Other Information)	講義中にノートをとること。講義中の私語・飲食は慎むこと。 講義室で帽子はかぶらないこと。講義中に無断で退出しないこと。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	各担当教員の研究室前に掲示したTel/Mail等へ連絡 もしくは在室時に直接面談。

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
論理学				佐藤 恵	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	30名	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
論理学は、論理的に考える、論理的に話す、論理的な文章を書くための基本的な学問である。いくつかの専門分野に分かれるが、本講義では、基本的な知識と技法について説明する。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
論理学の基礎的な知識を習得する。論理的な思考ができ、それを正しく表現できる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	前半の講義の進め方の説明とグループ分け				
第 2 回	論理学とは何か				
第 3 回	記号論理学1				
第 4 回	記号論理学2				
第 5 回	集合論1				
第 6 回	集合論2				
第 7 回	後半の講義の進め方の説明とグループ分け				
第 8 回	論理的に考える1				
第 9 回	論理的に考える2				
第 10 回	論理的に考える3				
第 11 回	論理的に書く1				
第 12 回	論理的に書く2				
第 13 回	論理的に議論する1				
第 14 回	論理的に議論する2				
第 15 回	論理的に議論する3				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
毎講義での発表 60 (%) レポート (2 回) 40 (%)	毎講義での口頭発表と、レポートの内容を基に評価する。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	適宜配布する。
備 考 (Other Information)	少人数でのグループワークを中心とするため、毎回出席する強い意志がない者は遠慮するように。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メール : sato-megumi [at] fukuchiyama. ac. jp [at] を@に置換

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
観光まちづくり論 (地域観光論 / 観光ビジネス論)				谷口 知弘	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
地域社会は、少子高齢化や過疎化、ソーシャル・キャピタルの減退などによる住民自治機能の低下によって、従来担ってきた防災や教育、福祉、文化の継承など、様々な「まちづくり」活動の停滞や破綻の危機に直面している。 本講義「観光まちづくり論」では、これらの地域社会の問題解決の糸口を「観光」の視点を活かした「まちづくり」に求め、その理論と手法を実践の系譜と展開から講究する。 尚、授業の進め方として、観光まちづくりの最前線で活躍するキーパーソンをゲストに招き、実践者との対話から検討するとともに、先進事例に関する受講者の報告をもとに討論する時間を設けることとする。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
①「観光」視点から取り組む持続可能なまちづくりの理論と手法を理解する。 ②京都府北部地域における観光まちづくりの現状を把握し、課題と展望を議論することができる。 ③地域資源を活用した観光まちづくりの新たな事業提案ができる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	導入：本講義の目的とプロセス ワークショップ「『観光』とは？自身の経験から考えよう」				
第 2 回	第 1 部 「観光まちづくり」とは ①まちづくりの系譜と展開				
第 3 回	②観光まちづくりの系譜と展開				
第 4 回	③理解を深めるワークショップ「観光×まちづくりの魅力と課題」				
第 5 回	第 2 部 地域社会の課題と観光まちづくり ①教育・文化と観光まちづくり				
第 6 回	②農業と観光まちづくり				
第 7 回	③健康と観光まちづくり				
第 8 回	④住民自治と観光まちづくり				
第 9 回	⑤理解を深めるワークショップ「地域社会の課題と観光まちづくりを考える」				
第 10 回	第 3 部 北近畿における観光まちづくりの取り組み ①行政施策と観光まちづくり～福知山市の観光政策とまちづくり				
第 11 回	②産学公民協働の観光まちづくり～プラットフォームとしての「海の京都 DMO」				
第 12 回	③市民活動と観光まちづくり～手づくり市による地域活性化				
第 13 回	④企業活動と観光まちづくり～ゲストハウスを起点とした地域活性化				
第 14 回	⑤理解を深めるワークショップ「北近畿の地域資源を活用した観光まちづくり」				
第 15 回	まとめのワークショップ「観光まちづくりの課題と展望を語ろう」				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
予習：各回のテーマについて、文献やインターネットによる調査、自身の関心を整理するなどあらかじめ学習しておくこと。 復習：講義で得た気づきや成果をレポートにまとめること。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
クラスへの貢献 (50%) 期末レポート (50%)	秀：適切な課題を設定し、独創的且つ実現性の高い課題解決策を提示できている。 優：適切な課題を設定し、すぐれた課題解決策を提示できている。 良：課題を設定し、一応の課題解決策を提示できている。 可：課題設定と解決策の提示が、いずれも最低限の水準を満たしている。 不可：課題設定や解決策の提示が水準に達していない。
テキスト (Textbook)	特になし
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	講義で配布するレジュメで指示する
備考 (Other Information)	・3分の1以上(6回以上)の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	taniguchi-tomohiro@fukuchiyama.ac.jp (谷口)

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
数学基礎Ⅱ（数学）				三品 勉	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
数学の手法・考え方はあらゆる分野に広く浸透し応用されている。より深く物事を理解するためには欠かせない手段として威力を発し、現在では芸術や文学といった一見数学と関係のない分野でも幅広く活用されている。コンピュータによる数値モデルの扱いが容易になったのがその要因といえる。本講義では、微分積分学とならんで、数学としてもっとも基礎的な分野である線形代数学を学ぶ。その応用は多岐にわたるが、一例として、経済学や経営学で重要な経営意思決定手法である数値計画法を取り上げる。約50年前に開発され、今でもコンピュータソフトで使われているエレガントなシンプレックス法を学ぶ。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
行列と行列式の構造を理解し、基本的な演算ができる。行列の基本変形により、シンプレックス法を計算することができる。その他、経営意思決定に数学がどのように役立っているかについて説明することができる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ベクトルと行列				
第 2 回	ベクトルと行列の計算				
第 3 回	非可換性				
第 4 回	逆行列				
第 5 回	掃き出し法				
第 6 回	行列式				
第 7 回	クラメルの公式				
第 8 回	まとめと第 1 回日テスト				
第 9 回	線型変換				
第 10 回	固有値・固有ベクトル				
第 11 回	行列の対角化				
第 12 回	線形計画法				
第 13 回	シンプレックス法の計算				
第 14 回	双対問題				
第 15 回	まとめと第 2 回日テスト				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
授業で学んだテーマについて、関連の問題を必ず解いておくこと。問題はその都度指示する。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業内試験 (100 %) 授業参加 (α %)	第1回・第2回テスト(授業内試験の70%) 小テスト(授業内試験の30%) 議論・質問・コメントによる授業への参加回数 (追加点)
テキスト (Textbook)	【書名】 特になし 【出版社】 【著者】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	線形代数 田島一郎 共立出版株式会社
備考 (Other Information)	数学基礎Ⅰを履修しておくことが望ましい
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	Eメール

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
グローバル特別講義Ⅳ（公共経営演習Ⅳ）				谷口 知弘 / 杉岡 秀紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要(Course Description)					
グローバル特別講義Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは主に行政セクター、市民セクターで重要なテーマを取り上げ、キーパーソンをゲストに招き、地域経営の実際について学び協働のあり方を考えた。 グローバル特別講義Ⅳでは、協働の主体としての企業セクターの活動を中心に学ぶこととし、福知山市を拠点にする事業展開する経営者をゲストに迎え、現場からの報告を元にマルチパートナーシップによる社会課題解決の現況を学びこれからを考える。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
公共を担う重要な主体である企業セクターの多様な役割や重要性、具体的な姿を理解する。 福知山市における企業家の活動状況を認識し、他セクターとの協働の実際を理解し今後の可能性を構想する。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	導入～ガイダンスと問題提起				
第 2 回	第 1 部 事業者が先導する地域づくり レクチャー①株式会社方式によるまちづくり事業主体「株式会社フロント」の挑戦				
第 3 回	レクチャー②ライフスタイルプロデュースを軸にしたホテル経営とまちづく				
第 4 回	レクチャー③地域と共にある宴会場のビジネス再生とまちづくり				
第 5 回	レクチャー④山を守り、木を活かす林業事業者の試み				
第 6 回	ワークショップ①持続可能な地域社会と企業セクターの役割を考える				
第 7 回	第 2 部 若手経営者が集い地域と関わる～商工会議所青年部と青年会議所の試み レクチャー⑤福知山商工会議所青年部と地域づくり				
第 8 回	レクチャー⑥福知山青年会議所と地域づくり				
第 9 回	ワークショップ②若手経営者コミュニティの役割と可能性を考える				
第 10 回	第 3 部 地域に根ざした中小企業の役割 レクチャー⑦事業継続と持続可能な地域づくり-1				
第 11 回	レクチャー⑧事業継続と持続可能な地域づくり-2				
第 12 回	レクチャー⑨事業継続と持続可能な地域づくり-3				
第 13 回	ワークショップ③「家業を継ぎ、地元で働き仲間と暮らす」働き方・暮らし方				
第 14 回	まとめ レクチャー⑩「経営」と地域づくり				
第 15 回	ワークショップ④「私」と地域の未来を描く				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
予習：各回のテーマについて、文献やインターネットによる調査、自身の関心を整理するなどあらかじめ学習しておくこと。 復習：講義で得た気づきや成果をレポートにまとめること。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
クラスへの貢献 (50%) 期末レポート (50%)	持続可能な地域社会形成における企業セクターの役割や他セクターとの協働について下記を基準に評価する。 秀：理解して、問題点を的確に指摘でき、かつ、問題解決の優れた政策を提示できる。 優：理解して、問題点を的確に指摘し、かつ、問題解決の適切な政策を提示できる。 良：理解して、問題点を的確に指摘できる 可：最低限の理解はできている。 不可：説明できない。
テキスト (Textbook)	特になし
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	講義で配布するレジュメで指示する
備 考 (Other Information)	・「グローバル特別講義Ⅲ（公共経営演習Ⅲ）」と合わせて履修することが望ましい。 ・詳細は変更する可能性があるため、後日掲示板で連絡する。 ・ゲストの都合により、変更がありうるので掲示に注意すること。 ・3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	taniguchi-tomohiro@fukuchiyama.ac.jp（谷口）

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
社会調査論				佐藤 充	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
社会調査は、日々変化する社会がどのような状況にあるのかを明らかにし、また社会が直面する問題がいかなる要因によって生じているのかを検討するための有力なツールである。現代社会では、幅広い目的のもとで、大学のみならず行政や企業等により、さまざまな社会調査が実施されている。 本講義は、社会調査の基本的事項（社会調査の目的、歴史、方法論、調査倫理、各種調査の手法、収集データの分析など）を学習して、自らで調査を企画・実施し、収集したデータの分析を行うための基礎的な知識を身につけることを目的とする。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
① 社会調査の基本的な考え方を理解して、的確な方法で適切に調査を企画・実施し、収集したデータを分析できるようにする。 ② 社会調査を実際に行うために必要となる調査倫理を身につける。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	イントロダクション 現代社会と社会調査				
第 2 回	社会調査とは何か				
第 3 回	社会調査の歴史				
第 4 回	社会調査における倫理				
第 5 回	社会調査の対象と方法				
第 6 回	既存の資料・データ収集と活用				
第 7 回	調査票調査の方法（1） 調査のプロセスと方法				
第 8 回	調査票調査の方法（2） 調査票の設計				
第 9 回	調査票調査の方法（3） サンプリングの理論				
第 10 回	調査票調査の方法（4） 調査票調査のデータ化作業				
第 11 回	調査票調査の方法（5） 調査結果の分析				
第 12 回	質的調査の方法（1） 調査のタイプと考え方				
第 13 回	質的調査の方法（2） インタビュー調査とフィールドワークの技法				
第 14 回	質的調査の方法（3） 調査結果の分析				
第 15 回	全体のまとめ より良い調査を行うために				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
① 各講義の最後に、次回までの小課題と予習の範囲を指示する。 ② 講義前には、小課題に取り組むとともに、教科書の指定された範囲を読むこと。 ③ 講義後は、配布資料とノートを読んで復習すること。 ④ ニュースや新聞記事等を目を通し、社会調査データの結果や解釈に注目しておくこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末レポート (60%) 小課題 (30%) 講義での発言 (10%)	秀：概念やフレームワークを適切に用いて、論理的かつ客観的に優れた説明ができる。 優：概念やフレームワークを適切に用いて、論理的かつ客観的に説明ができる。 良：概念やフレームワークを用いて、おおよその説明ができる。 可：概念やフレームワークを理解し、最低限の説明ができる。 不可：概念やフレームワークが理解できず、説明ができない。
テキスト (Textbook)	【書名】 新・社会調査へのアプローチ 論理と方法 大谷信介ほか 【出版社】 ミネルヴァ書房 【出版年】 2013年
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	各講義のなかで、適宜、参考文献を提示する。
備 考 (Other Information)	受講にあたっては、統計学を履修していることが望ましい。 講義に3分の2以上出席しなければ定期試験は受験できません。 講義中は、できるだけ、積極的な発言を求めます。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	配布するレジメに記載された連絡先に連絡すること。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
経営工学概論 (企業システム論/生産システム論)				三品 勉	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	有 (名) ・ 無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
経営工学の英語表記は多種にわたるが、世界で最も多く使われ、また歴史があるのは IE (Industrial Engineering) である。経営工学はもともと生産システムを主として扱うことから出発しているのがその理由である。現在では企業運営全体をその対象とし、効率的な経済活動を行う強力な手段として活用されている。本講義では伝統的に扱われている生産システムを例として取り上げ、生産システムの基礎知識と、その成り立ちについて解説する。生産現場ではどのような工夫と実践をして、我国各社が世界に誇る生産体制を作り出しているかを述べる。また新しい経営工学の概念についても説明する。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
経営工学の概要を理解し、生産活動や役割の分析・促進に経営管理に関する諸手法が使われていることを説明することができる。生産システムの全体最適化の概念と、生産に関わる品質やコスト構造を理解することができる。需要予測・フレキシブル生産体制・SCM等の概念を述べることができる。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	経営工学の概要－目的と対象範囲 企業活動の理解				
第 2 回	生産活動と経営管理				
第 3 回	流れづくりとしての生産システム				
第 4 回	流れの分析				
第 5 回	JITとTOC ボトルネックへの対応				
第 6 回	品質の概念				
第 7 回	コスト構造とCVP分析				
第 8 回	まとめと第 1 回目テスト				
第 9 回	生産の計画と統制				
第 10 回	フレキシブルな生産システムフレキシブルな生産システム MRP				
第 11 回	SCM				
第 12 回	需要予測とブルウィップ効果				
第 13 回	生産拠点の世界各地への分散				
第 14 回	外部講師による授業（講師の都合により第 3 ～ 7 回目に行う可能性がある）				
第 15 回	総まとめと第 2 回目テスト				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
前回学習した部分と、次回に関わる分の教科書を読んでおくこと。多くの学説や用語が出てくるが、経営学をより深くかつ広く学ぶ際に役立つので、基本的なものは皆覚えること。変化している生産システム体系の流れを、その原因・結果・他への影響といったストーリー性を持って理解すると楽しく学べるので実践してほしい。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業内テスト (100 %) 授業参加・レポート (α %)	テスト点数による学内評価基準を採用 議論・質問・コメントによる授業への参加・レポート (追加評価)
テキスト (Textbook)	【書名】 コア・テキスト生産管理 【著者】 富田・糸久 【出版社】 新世社 【出版年】 2015
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	必要に応じて指示する
備考 (Other Information)	特になし
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	Eメール

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
交流居住論(旅行業務 I)				塩見 直紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
日本の農山漁村の置かれている現状を踏まえ、都市農村交流や移住定住がもつ農村地域再生の可能性と現代的意義について学ぶ。 具体的な国内の事例（都道府県、市町村、企業、NPO等）を中心に、先進的な取り組みについて研究し、事業を企画する理論と手法を身につける。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
・ 都市農村交流や移住の取り組みなどの現状と課題について基本的な知識を修得する。 ・ 交流や定住促進を通じた地域振興策の概要を身につける。 ・ 地域資源（地域資源創出）を活かした交流事業や定住促進の独自の企画を立案できる。					
teijyu					
第 1 回	交流居住論の概要と目指す方向性について（オリエンテーション）				
第 2 回	交流、定住をサポートする若手ベンチャーの先進的取り組みに学ぶ (1)				
第 3 回	交流、定住をサポートする若手ベンチャーの先進的取り組みに学ぶ (2)				
第 4 回	交流、定住をサポートする若手ベンチャーの先進的取り組みに学ぶ (3)				
第 5 回	日本の農村の現状と課題について				
第 6 回	日本における旅の歴史（人はなぜ旅をするのか）				
第 7 回	交流とは何か、交流の可能性とは				
第 8 回	交流、定住促進等による地域再生に関するワークショップ（個別プレゼン準備）				
第 9 回	現代の若者のローカル志向について				
第 10 回	空き家対策について				
第 11 回	地域資源を活かしたローカルビジネスの創造について				
第 12 回	選ばれる農村とは				
第 13 回	地域資源調査とブランディングと情報発信について				
第 14 回	クリエイティブ人材の創造性発揮空間としての農村の可能性				
第 15 回	交流、定住促進等による地域再生に関するプロジェクト 個別プレゼンテーション				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
・ 観光、交流、移住、定住に関する情報や地域のあり方について、日ごろから問題意識をもつこと。 ・ 新しい事業や世にない仕組みを自分が創出するという気概をもち、関連書を手にするなど、自己学習をおこなうこと。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (60%) 毎回の感想・気づき・提案シート (20%) 個別最終プレゼン (20%)	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、課題や独自の解決策を的確に指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、課題を理解し、解決策を提示できる 良：おおよその説明はできており、かつ、課題を理解している 可：課題の説明において、最低限の水準を満たしている 不可：課題が説明できていない
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	毎講義のレジュメの中で、適宜、参考文献を紹介する
備考 (Other Information)	3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする。※ 1 回目の授業も 5 回の欠席を含むので注意
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	メール (conceptforx@gmail.com) で連絡

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
公共経営入門				杉岡 秀紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
公共経営の現場では、産学公NP0のセクターの文化的・機能的な壁を越えて、地域の公共的活動や政策形成を主導、また、コーディネートできる人材が求められている。また、このような協働型社会におけるマルチセクターを横断する人材には、公共マインドやビジネスマインド、知識のみならず、技法的な側面もますます重視されてきている。 そこで、本講義においては、まず公共とは何か、公共経営とは何か、NPMの基礎について学ぶ。次に公共マーケティングについて、キーとなる概念の学習を毎回行い、ケーススタディを通して現実的な公共課題へ適応し、模範的に学習していく（2回で1テーマが完結）。 なお、講師は、公共政策大学院修了後、行政、民間企業、NP0、大学など多様な職場で働いてきた経験を持つ。そういった意味から机上の空論ではなく、現場から抽出されたエッセンス、実際の社会で使えるスキルというものに照射して、講義を進める。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
以下の知識・スキルを体得することを到達目標とする。 ・対象となる課題群の相互関係を把握し分析することができる。 ・地域における複雑な課題群について、その解決に必要な要素の特定と解決のためのプログラムの提示及び適用ができる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス（講義の概要、成績評価、公共経営について）				
第 2 回	公共とは何か、NPMとは何か				
第 3 回	公共経営とマーケティング思考				
第 4 回	ケーススタディ（公共課題への適用：マーケティング思考）				
第 5 回	公共経営とロジカルシンキング				
第 6 回	ケーススタディ（公共課題への適用：ロジカルシンキング）				
第 7 回	公共経営とクリエイティブ・シンキング				
第 8 回	ケーススタディ（公共課題への適用：クリエイティブ・シンキング）				
第 9 回	公共経営とクリティカル・シンキング				
第 10 回	ケーススタディ（公共課題への適用：クリティカル・シンキング）				
第 11 回	公共経営とロジカル・ライティング				
第 12 回	ケーススタディ（公共課題への適用：ロジカル・ライティング）				
第 13 回	公共経営とプレゼンテーション				
第 14 回	ケーススタディ（公共課題への適用：プレゼンテーション）				
第 15 回	ふりかえり、まとめ				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
・予習としては、参考図書を読んでおくことが望ましい。 ・復習としては、毎回配布するレジュメをしっかりと読みなおし、理解を深めること。 ・またペアワークやグループワークのために、日々のニュースや地元新聞を絶えずチェックしておくこと。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
出席点 (15%) 授業態度・講義への貢献 (25%) 期末レポート (60%)	秀: 講義で習った概念やスキルを体得し、自分の言葉で論理的かつ客観的に説明できる。また、課題点も指摘することができる。また、自学自習や実践につなげている。 優: 講義で習った概念やスキルを体得し、自分の言葉で論理的かつ客観的に説明できる。また、課題点も指摘することができる。また、課題点も指摘することができる。 良: 講義で習った概念やスキルを理解でき、他者に一部説明することができる。 可: 講義で習った概念やスキルを最低限理解している。 不可: 講義で習った概念やスキルを理解できていない。
テキスト (Textbook)	特になし。講義内に配布するレジュメを中心に行う。 (プレゼンテーションについてはアカデミック・スキルテキスト参照)
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	ユージン・バーダック『政策立案の技法』(東洋経済新報社、2012)、川喜田二郎『発想法ー創造性開発のためにー』(中公新書、1967)、齋藤嘉則、株式グロービス監修『問題解決プロフェッショナルー思考と技術ー』(ダイヤモンド社、1997)、バーバラ・ミント、グロービス・マネジメント・インスティテュート監修、山崎康司訳『考える技術・書く技術ー問題解決力を伸ばすピラミッド原則ー』(ダイヤモンド社、1999)、トニー・ブザン/バリー・ブザン 著、神田昌典訳『ザ・マインドマップー脳の力を強化する思考技術ー』(ダイヤモンド社、2005)、細谷功『地頭力を鍛えるー問題解決に活かす「フェルミ推定」ー』(東洋経済新報社、2007)
備考 (Other Information)	・本講義は、毎回グループワークやケース・メソッドを実施し、学びの双方向性を重視する(アクティブ・ラーニング)。座学スタイルではないため留意すること。 ・3分の1以上(6回以上)の欠席は、単位不可とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	Eメール(sugioka-hidenori@fukuchiyama.ac.jp)に連絡すること。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
地理学				福島 貞道 / 塩見 直紀	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要(Course Description)					
地理学とは、「地表の自然・人文にわたる諸現象を、環境・地域・空間などの概念に基づいて解明しようとする学問」（『最新地理学用語辞典』）である。本授業では、地域経営やまちづくり、観光、交流等の観点から、地理学を学んでいく。特に、風景、景観、都市性、歴史、地域文化、農村風景、棚田、里山、独特な気候、独特な地形を活かした観光やまちづくりを例にし、地理的見方や地理的な考え方を育む。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
・ 地理学について基本的な知識を修得する。 ・ 風景、景観、都市性、歴史、地域文化、農村風景、棚田、里山、独特な気候、独特な地形を活かした観光やまちづくり、地域振興策へとつながる感性やまなざしを獲得する。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス及び地理学を学ぶ意義				
第 2 回	日本の風土、伝統、文化（まちづくりに対する基本的感性の源）（1）				
第 3 回	風景を活かした観光、まちづくり				
第 4 回	景観を活かした観光、まちづくり				
第 5 回	都市性を活かした観光、まちづくり				
第 6 回	歴史を活かした観光、まちづくり				
第 7 回	地域文化を活かした観光、まちづくり				
第 8 回	小括、試験（1）				
第 9 回	日本の風土、伝統、文化（まちづくりに対する基本的感性の源）（2）				
第 10 回	農村風景をいかした観光、まちづくり				
第 11 回	棚田をいかした観光、まちづくり				
第 12 回	里山をいかした観光、まちづくり				
第 13 回	独特な気候を活かした観光、まちづくり				
第 14 回	独特な地形を活かした観光、まちづくり				
第 15 回	小括、試験（2）				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
・ 居住地や故郷、旅先などの地形や気候、地域文化等に絶えず関心を持ち、地理学的な見方、考え方を培うよう努めること。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
前半 小括試験(40%) 後半 小括試験(40%) 平常点(20%)	秀：風景、景観等の意義を理解し、必要なキーワードを過不足なく用いて、論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を的確に指摘できている。 優：風景、景観等の意義を理解し、キーワードを用いながら論理的に客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している。 良：風景、景観等の意義を理解し、凡その説明ができ、かつ、問題点を理解している。 可：風景、景観等の意義、地理学としての仕組みや問題点の説明において、最低限の理解ができている。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 ・講義に際し、レジュメを配布する。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	・適宜紹介する
備考 (Other Information)	・6回以上の欠席者は、定期試験の受験は認めない。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	・メール等でアポイント

科目名称 (Course Title)				担当教員(Instructor)	
グローバル特別講義Ⅱ (外国文化論)				井口 和起	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要 (Course Description)					
グローバル化が著しく進んだ現代世界の中で、日本文化圏のなかで暮らしている私たちの生活も、他の国や地域の人びとの諸活動とのつながり、言い換えると、「外国文化」あるいは「異文化」圏との人・モノ・情報などの交流を抜きにして成り立ってはいません。他方、私たちは異文化地域に影響を与えてもいます。近現代以前からも文化間の交流・相互作用や融合があったことは言うまでもありません。 この授業では、私の中国での教師生活や生活体験、歴史資料や少数民族村落調査、加えてバチカン市国での日本近世資料整理の仕事に参加した体験などを紹介しつつ、外国文化＝異文化への接し方や理解の仕方、同時に異文化間の交流の歴史や今後のあり方などをみなさんと意見交換しながら考えていきます。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
「外国文化」（ここでは、現代中国の文化を事例としますが）を「理解」とはどういうことか。この課題を考えるために単に感覚的な把握（「共感」や場合によっては「嫉妬」）に止まるのではなく、理性的な把握のための基本的な思考の枠組の理解を深め、国際的な視野や人権意識を持って活動できる素地を身につけるとともに、日本文化の再認識と人類普遍の価値への理解を深める視点を獲得することを目指します。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ガイダンス：「外国文化」「異文化」とは何か？この授業のねらい。				
第 2 回	1980年代の中国・西安の第一印象				
第 3 回	中国・西安外国語大学での授業				
第 4 回	中国・西安外国語大学の学生たち				
第 5 回	1980年代の中国・西安での暮らし				
第 6 回	1980年代の中国・シルクロードの旅				
第 7 回	1980年代の中国・南京と東北地域での調査旅行				
第 8 回	2000年代の中国・雲南農業大学との共同研究―研修プランづくり―				
第 9 回	2000年代の中国・元陽棚田の少数民族文化―				
第 10 回	現代中国の学生たち―瀋陽・東北大学で―				
第 11 回	バチカン市国図書館の日本の古文書―整理をめぐって―				
第 12 回	バチカン市国図書館の日本の古文書―修復をめぐって―				
第 13 回	異文化理解のために―考え方や振る舞いの違いと言語構造―				
第 14 回	異文化理解のために―宗教や歴史の相互理解―				
第 15 回	まとめ：グローカリストを日ざすみなさんへの期待―				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
予習の必要はほとんどありません。そのかわり、毎授業時間ごと、終了時に簡単な感想や意見を書いて提出してもらいます。また、授業の進行の中で適宜中間レポート提出を要求するので、復習として必ずノートを整理しておくこと。さらに、参考文献は授業の最終回までに必ず読み終えておくこと。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
授業中の意見交換への参加 (20%) 毎回提出カード記載内容 (20%) 最終レポート (60%)	秀：外国文化理解の基本的な思考の枠組を理解し、適切な事例を引いてそれを自分の言葉で説明し、自国文化の特質を異文化圏の聴き手に伝えることができ、鋭い人権感覚を持っている。 優：外国文化理解の基本的な思考の枠組を理解し、例を挙げて自分の言葉でそれを説明でき、自国文化の特質も語れ、人権意識の重要性を理解している。 良：外国文化理解の基本的な思考とはなにかについて説明ができ、人権意識も持っている。 可：自国文化絶対化の弊を脱し相対化してとらえることができる。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 特になし。授業中の配布資料や画像を活用。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	鈴木孝夫『ことばと文化』（岩波書店：青版C98、2014年） 青木保『異文化理解』（岩波書店：赤版740、2015年）
備 考 (Other Information)	
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	一覧表参照。

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
経済学入門				三好 ゆう	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	無	科目等履修
授業の概要(Course Description)					
経済学は200年以上も続いている学問である。経済学の巨匠達は、「すべての人々が幸せになるためにはどうしたらよいか」、「社会のしくみにより貧困に喘ぐ人々が生みだされているならば、どのように改善することで解決できるのか」を長い歴史をかけて考え続けてきた。 経済学モデルは日々進化しているようにみえて、実はその理論の背後にある思想は新しいものではない。発展しつつも螺旋的に繰り返されてきたといえる。 そこで本講義では、古典といわれる幾つかの名著の要点をおさえつつ、そこでの経済理論が日常生活にどのように生きているか、日常生活での現象をどのように説明することができるかを理解することを目的とする。					
授業の到達目標(Course Objectives)					
本講義の最終到達目標は、経済学の基本姿勢を理解し、今後、経済学の応用分野を学ぶにあたっての基礎的知識を身につけることにある。					
授業計画(Course Schedule)					
第 1 回	イントロダクションー経済学の扱う対象ー				
第 2 回	人間と動物は違うのか				
第 3 回	社会秩序を導く人間本性とは何か				
第 4 回	どうしたら富は増えるのか				
第 5 回	価値とは何か				
第 6 回	なぜ貿易をするのか①				
第 7 回	" ②				
第 8 回	不況から脱出できるのか①				
第 9 回	" ②				
第 10 回	" ③				
第 11 回	社会現象に法則性はあるのか①				
第 12 回	" ②				
第 13 回	人間の欲望は数値化できるのか①				
第 14 回	" ②				
第 15 回	経済学はいま何を考えているか				
授業時間外学習(Supplementary Activities)					
① 毎講義の復習では、レジュメの他、都度示す参考書等を活用し、十分な理解をしておくこと。					
② ニュースや新聞に絶えず目をつけておくこと					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (100%)	秀：必要なキーワードを過不足なく用いて、説明ができる 優：キーワードを用いながら、概ね説明ができる 良：キーワードを用いながら、ある程度は理解できている 可：キーワードやしぐみについて、最低限の理解ができている 不可：キーワードやしぐみについて理解できていない
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】 ※特になし。授業で配布するレジュメを中心に行う。
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	※ 毎講義のレジュメの中で、適宜、参考文献を紹介する
備考 (Other Information)	・ 学生の理解に応じて、授業計画（授業の進捗）が前後することがある
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	週2コマをオフィスアワーとする（事前連絡は不要） 具体的な曜日・時限については、オフィス前に掲示しておく

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
ソーシャルデザイン				谷口 知弘	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	3 年次	講義	無	科目等履修・聴講
授業の概要 (Course Description)					
ソーシャルデザインは、対話を大切にしたいデザインプロセスから笑顔で暮らせる持続可能な地域社会を創る新しい理論と方法である。市民一人ひとりの多様な想像力と創造力を信じ育む未来創造のデザインプロセスを、事例から講究し体験的に学ぶ。 本講義においては、少子高齢化・人口縮小社会において危機的な問題状況におかれる「ローカル」の動きに注目する。ローカルで展開されるソーシャルデザインを通して、経済の物差しで幸せを測ってきた経済至上主義から脱皮し、家族やコミュニティ、平等性や精神性、自然環境と関わりなどを重視するオルタナティブな物差しとしての「幸福度」についても検討する。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
「ソーシャルデザイン」の理論と方法について、その意味と価値を理解する。 「ソーシャルデザイン」の考え方を援用した地域社会の問題解決や未来創造の提案ができる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	導入～ガイダンスと問題提起				
第 2 回	第 1 部 「ソーシャルデザイン」とは ①まちづくりの系譜とソーシャルデザイン				
第 3 回	②デザイン思考とソーシャルデザイン				
第 4 回	③理解を深めるワークショップ「ソーシャルデザイン×地域社会づくりの魅力と課題」				
第 5 回	第 2 部 ソーシャルデザインの手法を学ぶ ①ソーシャルデザインとワークショップ-1～集落地とイノベーション				
第 6 回	②ソーシャルデザインとワークショップ-2～対話とデザインプロセス				
第 7 回	第 3 部 地域社会の課題とソーシャルデザイン ①教育・文化とソーシャルデザイン				
第 8 回	②観光とソーシャルデザイン				
第 9 回	③健康とソーシャルデザイン				
第 10 回	④住民自治とソーシャルデザイン				
第 11 回	⑤理解を深めるワークショップ「地域社会の課題とソーシャルデザインを考える」				
第 12 回	第 4 部 「ローカル」におけるソーシャルデザインの取り組み ①事例調査報告とディスカッション-1				
第 13 回	②事例調査報告とディスカッション-2				
第 14 回	③事例調査報告とディスカッション-3				
第 15 回	④理解を深めるワークショップ「ローカルとソーシャルデザインを考える」＋まとめ				

授業時間外学習 (Supplementary Activities)	
予習：各回のテーマについて、文献やインターネットによる調査、自身の関心を整理するなどあらかじめ学習しておくこと。 復習：講義で得た気づきや成果をレポートにまとめること。	
成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
クラスへの貢献 (50%) 期末レポート (50%)	秀：適切な課題を設定し、独創的且つ実現性の高い課題解決策を提示できている。 優：適切な課題を設定し、すぐれた課題解決策を提示できている。 良：課題を設定し、一応の課題解決策を提示できている 可：課題設定と解決策の提示が、いずれも最低限の水準を満たしている。 不可：課題設定や解決策の提示が水準に達していない。
テキスト (Textbook)	特になし
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	講義で配布するレジュメで指示する
備考 (Other Information)	・3分の1以上（6回以上）の欠席は、単位不可とする
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	taniguchi-tomohiro@fukuchiyama.ac.jp (谷口)

科目名称(Course Title)				担当教員(Instructor)	
行政学				富野 暉一郎	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	2 年次	講義	無	科目等履修 ・ 聴講
授業の概要 (Course Description)					
この講義は行政学の入門編です。現代の社会では、行政は私たちの生活の隅々まで浸透し、行政のあり方が私たちの人生に深い影響を与えています。行政は社会の中でどのような役割を持っているのか、その仕組みはどのようなになっているのか、私たちの生活と行政はどのように関係しているのか、そして、私たちは主権者として行政にどのように関わっていくことが必要なのか、などをこの講義で考察していきたいと思います。 講義では、実際に社会で起きている現象や事件などを、行政の視点から分析するほか、身近な行政である市役所を対象に、その業務を学び、職員等との対話を行います。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
①行政とは何か、について基礎的な知識を得。 ②日本の行政の仕組みについて、基礎的な理解ができる。 ③国と地方自治体との関係を理解する。 ④地方自治の役割と課題について知る。 ⑤市職員との対話を通じて公務員に求められる資質について理解を深める。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	イントロダクション この講義で学ぶこと				
第 2 回	三権分立、政治と行政、				
第 3 回	議院内閣制の行政と二元代表制の行政				
第 4 回	日本の行政の特徴				
第 5 回	地方分権と地域社会の再生				
第 6 回	行政の仕組みⅠ 国と地方自治体 地方自治の国際比較				
第 7 回	行政の仕組みⅡ 行政の組織、官僚制度				
第 8 回	行政の仕組みⅢ 財政の仕組み				
第 9 回	行政と政策Ⅰ				
第 10 回	行政と政策Ⅱ				
第 11 回	協働型社会と地域経営				
第 12 回	グループ討議				
第 13 回	市職員との対話				
第 14 回	グループ討議Ⅱ				
第 15 回	現代行政の課題				
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
①次回の講義で学ぶテーマについて、指定された文献・資料等を読み込んでおくことを求めます。 (レポート提出を求めることがある)					
②グループ討議及び市職員との対話については、グループで役割分担を決めて事前学習をします。					

成績評価の方法と基準 (Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (70%) レポート (3回) (30%)	期末試験とレポートについては、①論点が明確に捉えられているか ②講義の内容に即しているか、③論旨に一貫性があるか、の3点について5段階で評価します。また自主的な学習の成果を盛り込んでいると認められるものについては、期末試験で10点以内、レポートで合計5点以内を加点します。
テキスト (Textbook)	【書名】 【著者】 【出版社】 【出版年】
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	村松岐夫 『行政学教科書』 有斐閣 2011年 大森 彌 『自治体行政学入門』 良書普及会 2000年
備考 (Other Information)	3分の1以上 (6回以上) の欠席は、単位不可とする。
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	初回の講義で連絡方法を指示します。

科目名称(Course Title)				担当教員 (Instructor)	
プログラミングⅡ				神谷 達夫	
開講学期 (Semester)	単位数 (Credits)	履修年次 (Requirement)	授業形態 (Class Type)	受講定員の有無 (Maximum Enrollment)	授業公開 (Workshop Class)
後学期	2 単位	1 年次	講義	有 (15名)	科目等履修・聴講
授業の概要 (Course Description)					
この講義は、プログラミングⅠに続き、データ処理の基礎を習得することを目的としている。したがって、本講義で取り扱う言語はPythonである。 この講義では、プログラミング言語Pythonを用いてプログラムが作成できるようになることを目指している。ファイル操作と簡単な統計処理を学んだ後、よく知られているプログラミングテクニックを習得する。					
授業の到達目標 (Course Objectives)					
プログラミング言語Pythonを用いて、簡単なデータ処理・統計処理のプログラムを作成できるようになる。また、よく知られているプログラミングテクニックを理解できるようになる。					
授業計画 (Course Schedule)					
第 1 回	ファイル操作	CSVファイルの取り扱い			
第 2 回	ファイル操作	処理自動化の意味			
第 3 回	ファイル操作	csvモジュールの使用			
第 4 回	基本統計量の算出	基本統計量を求めるプログラムを作る			
第 5 回	基本統計量の算出	歪度と尖度			
第 6 回	度数分布表	度数分布表作成プログラムを作る			
第 7 回	相関係数	相関係数を計算する			
第 8 回	数値計算による方程式の解法	方程式を数値計算で解く			
第 9 回	プログラミングの練習	例題を解く			
第 10 回	モンテカルロ法	モンテカルロ法で円周率を求める			
第 11 回	再帰アルゴリズム	再帰プログラムによりハノイの塔を解く			
第 12 回	再帰アルゴリズムの考察	再帰アルゴリズムに適したもの、適さないもの			
第 13 回	逆ポーランド記法	逆ポーランド記法の簡易電卓プログラムの作成			
第 14 回	簡易インタープリタの作成	簡易電卓プログラムを簡単なインタープリタにする			
第 15 回	まとめ	総合演習問題			
授業時間外学習 (Supplementary Activities)					
プログラミングできるようになるには、授業以外でもプログラムを作成することが重要である。帰宅してからでもプログラムが作成できるような環境を用意し、自分で作ったプログラムを実行することが理解への近道である。					

成績評価の方法と基準(Grading)	
評価方法 (割合)	評価基準
期末試験 (60%) レポート・課題提出 (40%)	秀：講義で扱ったプログラミングの知識とその応用方法を論理的に説明でき、その知識を応用できる 優：講義で扱ったプログラミングの知識とその応用方法を論理的に説明できる 良：おおよその説明はできており、かつ、簡単なプログラムは作ることができる
テキスト (Textbook)	【書名】 いちばんやさしい Python入門教室 【著者】 大澤 文孝 【出版社】 ソーテック社 【出版年】 2017
参考書・資料等 (Supplementary Reading)	ゼロからやさしくはじめるPython入門「基本からスタートして、ゲームづくり、機械学習まで楽しく学ぼう!」 クジラ飛行機 (著)、マイナビ出版 その他は、講義中に紹介する。
備 考 (Other Information)	
教員との連絡方法 (Contact With Instructor)	電子メールによる。 kamitani-tatsuo@fukuchiyama.ac.jp